

# 2000年アメリカ大統領選挙の研究 ーメディア政治時代の投票意思決定ー

飽戸 弘

キーワード：アメリカ大統領選挙 マスメディア 世論調査

American presidential election, media, public opinion poll

2000年アメリカ大統領選挙は、フロリダ州における開票の混乱など、いくつかの問題を残したが、ともかく無事に終了した。今回の選挙の最大の特徴は、共和党候補、民主党候補の「史上稀に見る大接戦」という状況であり、さまざまな問題がこのことから、より鮮明になったと言えよう。そこで本稿では、まず今回選挙の経過について概観する。予備選挙期、共和党・民主党両党の全国党大会、そして秋から始まるキャンペーン期と、夫々の段階での状況と経過を検討する。

1970年代より注目されてきたメディアの甚大な影響力、特にテレビの役割と、今回特に活躍したインターネットが、選挙結果に及ぼしたインパクトは、計り知れない。「メディア政治の時代」といわれる所以である。世論調査の導入、選挙参謀やメディア・スペシャリストなどの選挙のプロが活躍する「科学的選挙」の実態についても、検討しておく必要がある。

こうした経過の検討を通して、緒戦で注目された「前倒し選挙」の問題、金がかかりすぎる選挙の問題、メディア選挙とボランティアの問題、そして、フロリダで起こった開票の混乱にまつわる諸問題など、今日のアメリカ大統領選挙の持つ制度的問題についても、検討してみたい。これらの問題はここ数回の大統領選挙で徐々に現れていたいくつかの変化の兆候が、今回選挙でより顕著な形で露呈したと言うことだ。こうした状況の背景についても検討し、今後のアメリカ大統領選挙のあるべき姿についても、考えてみたい。

## 1、2000年アメリカ大統領選挙の概観

2000年アメリカ大統領選挙は、1月24日のアイオワ州党員集会で、幕が切って落とされた。その後、2月1日のニューハンプシャー州での最初の予備選挙、2月8日のデラウェア州、共和党、予備選挙、2月19日のサウスカロライナ州の予備選挙と続く。

序盤戦のハイライトは、なんと言っても3月7日の「スーパーチューズデー」である。このスーパーチューズデーによって、事実上、共和党、民主党の大統領候補がほぼ確定する。例年ならこの後、4月、5月、6月と、3ヶ月余の激戦によって、両党の大統領候補者が絞られて行

くのだが、今回は早々と候補が確定してしまい、その後の4ヶ月は開店休業に近い状態となった。これも今回の特徴の一つだ。

その後、7月、8月の、共和党、民主党の全国党大会が、中盤戦を盛り上げた。共和党大会直後、一旦、ブッシュ候補の17%近いリードとなり、勝負あったかに見えたが、民主党大会前後よりゴア候補、再び挽回、夏休み明けのレーバーデー頃には再び両者互角、となる。

こうして9月、レーバーデーより始まる終盤戦、キャンペーン期に入る。キャンペーン期のハイライトは、なんと言っても3回にわたるテレビ討論であった。第1回テレビ討論ではゴア候補、圧勝と見えたが、その後ゴア候補への批判が噴出、第2回テレビ討論直前には、ブッシュややりードという状況となる。第2回、第3回のテレビ討論では、両者、ほぼ互角で、ついに全く伯仲のなかで投票日を迎える。

開票結果は、全国的に見ても異例の大接戦。結局、フロリダ州の結果によって勝敗が決する、という事態となる。しかもフロリダ州での結果は前代未聞の大接戦。フロリダ州法による、両候補の得票が、0.05%以下の差の時には「再集計」(リカウント)という規定により、再集計の結果を待って、最終決定ということになり、大統領の当選は、それまでお預け、ということに

<表1> 2000年アメリカ大統領選挙の日程

2000/1/24	<= 2/7 <= 1/31* アイオワ州、党員集会
2/1	<= 2/8** ニューハンプシャー州、予備選挙
2/8	デラウェア州、共和党予備選挙
2/19	サウスカロライナ州、予備選挙
3/7	第1スーパーチューズデー<カリフォルニア、ニューヨークなどで予備選、党員集会>
3/14	第2スーパーチューズデー <テキサス州、フロリダ州などで予備選>
7/25	共和党副大統領候補選出 <ブッシュ共和党大統領候補は副大統領候補として、リチャード・チェイニー、元国防長官を指名、本人も受諾>
7/29 - 8/4	共和党全国党大会 (フィラデルフィア)
8/8	民主党副大統領候補選出<ゴア民主党大統領候補は、副大統領候補として、ジョセフ・I・リーバーマン、コネティカット州上院議員を指名、本人も受諾>
8/14 - 17	民主党全国党大会 (ロサンゼルス)
10/3	第1回テレビ討論 (ボストン、マサチューセッツ大学にて)
10/11	第2回テレビ討論 (ウインストン・セーラム、ウエークフォレスト大学)
10/17	第3回テレビ討論 (セントルイス、ワシントン大学)
11/ 7	投票日
12/12	連邦最高裁判決によりブッシュ候補大統領に当選と決定 <大統領誕生。フロリダ州、最終確定結果：ブッシュ、2,912,790 (49%)、ゴア、2,912,253 (49%)、差 537票 (0.00009%)。総投票数、5,963,070。>
2001/1/21	大統領就任式

\* 当初、1/31の予定を、2/7に変更したが、さらに1/24に変更。

\*\* 当初、2/8の予定を、2/1に変更 (本文参照)。

なった。しかも、共和党、民主党の訴訟合戦による法廷闘争が続き、ついに、開票より「36日後」、連邦最高裁判所が、ゴア候補の訴えには疑義あり、との判決が下るに至り、ついにゴア候補は法廷闘争を断念、ここにブッシュ大統領の誕生となる。

以上がごく大雑把な2000年アメリカ大統領選挙の経過である。以下、順次、両候補の戦い振りとその経過について、具体的に見てゆくことにしたい。

#### ＜2000年選挙のスタートライン＞ ——年頭での大統領候補立候補状況

さて、本格的な大統領選挙の戦いが始まる、2000年、年頭での、共和、民主、両党での主要な大統領候補は、＜表2＞の通りであった。この時点ですでに、共和党の大物候補と言われた、エリザベス・ドール、前米国赤十字社社長、及び、ダン・クエール、元副大統領は、資金難を主な理由として、撤退宣言している。例年では、予備選挙時代は、民主党で候補者が林立し、おかげで活力がみなぎり、前半リードするのだが、党大会以降は、予備選挙時代のあまりに激しい戦いのしこりが残り、まとまりが悪くなる。一方、共和党は、予備選挙時代は、比較的に少数の候補者に絞られるため、前半、やや盛り上がり欠けるが、後半は党としてよくまとまり、全国党大会以降、共和党が民主党に追いつく、というのが通常のパターンであった。しかし今回は、ほぼ逆の様相を呈している。今回は、ゴア候補が、現職副大統領であり、通常、現職は著しく有利であるため、よほど強力な対抗馬で無い限り立候補を断念してしまうため、このような結果になったと考えられる。

＜表2＞ 1999年9月での共和・民主両党の主な大統領候補者

共和党：
ジョージ・W・ブッシュ、テキサス州知事（53）
エリザベス・ドール、前米国赤十字社社長（63）*
ダン・クエール、元副大統領（52）*
フォーブス、出版社経営者（52）
ジョン・マケイン、上院議員（63）
ブキャナン、コメンテーター（60）
パウアー、社会活動家（53）
ハッチ、上院議員（65）
キース、元国務次官補（49）
民主党：
ゴア、副大統領（51）
ブラッドレー、元上院議員（56）

\* 2000年初頭で、すでに撤退

### ＜「前倒し選挙」とその功罪＞

2000年アメリカ大統領選挙のもう一つの特徴は、すべてが「前倒し」となった選挙であったということだ。まずは大統領候補の宣言もいつもより早く、1999年9月には、早くも民主党から2人、そして共和党からは9人の候補者が、名乗りをあげた。これは例年から見てたいへんな前倒しと言えよう。

選挙の序盤戦は、1月のアイオワ州党員集会、2月のニューハンプシャー州の予備選挙で幕が開けるのが例年の慣わしだ。この2州の結果は、最初の党員集会、最初の予備選挙として全米から注目を浴びる。テレビ、新聞などマスメディアも、両州の結果を詳細に報道し、その結果はその後の各州の選挙結果に甚大な影響を及ぼす。

近年の例では、この序盤戦で連戦連勝することで一挙に有利な体制を築くという戦略で、1976年、当時ジョージア州知事で、ほとんど無名であったカーターが、「カーターって誰？」と言われながらついに民主党の大統領候補の座を射止め、さらには大統領にまでなった。このことは序盤戦の重要性を一層印象付けた。1984年のハート旋風も「ヤッピー」<sup>1</sup>に支えられたゲーリー・ハートが、緒戦で連戦連勝、あわや民主党大統領候補の座を射止めるかに見えたが、後半、民主党の重鎮モンデールが必死の巻き返しを図り、辛うじて民主党の候補の座を確保した。しかし本選挙では敗れてしまった。逆に1988年のゲップハートは序盤戦に資金を投入し過ぎ、相手候補からテレビによる「ネガティブ広告」<sup>2</sup>の猛攻撃を受けたのだが、それに反論するだけの資金がなくあえなく敗退した。＜飽戸、1989年、参照＞。

こうして、序盤戦での結果は大きな影響力をもつため、メディアからも注目され、大々的に報道される。世論調査などは、その前にしばしば行なわれているが、党員集会、予備選挙はこれが初めてのため、大いに国民の関心を集め、注目されることになる。しかし、国土も人口も少なく、大きな産業もなく、全米から見ればごく弱小のこの2州が、アメリカ大統領選挙の最終結果に大きな影響力をもつことを、もっと大きな有力な州も快く思わず、ニューハンプシャー州より前に予備選挙を行なおうとしたこともあるが、目立ちたがりやのニューハンプシャー州は、州法で、どこの州よりも先に予備選挙を行なうと宣言し、他の州が予定を早めても、ニューハンプシャー州はもっと日程を繰り上げて応戦した。こうして近年は、アイオワ州、ニューハンプシャー州より先に選挙を行なおうとする州は、あまりなくなった。

今回もデラウェア州の共和党が2月8日のニューハンプシャー州と同じ日に予備選挙を行なおうとしたが、ニューハンプシャー州はさらに日程を早め、2月1日に変更してしまった。こうして、1月24日、アイオワ州党員集会、2月1日、ニューハンプシャー州予備選挙、2月8日、デラウェア州予備選挙、そして2月19日、サウスカロライナ州予備選挙と、2000年大統領選挙の序盤戦が始まった。まず、序盤戦で重要な役割を果たすこれらの選挙から見てみよう。

## 2、大統領選挙を占う序盤戦

### ——アイオワ州党員集会とニューハンプシャー州予備選挙

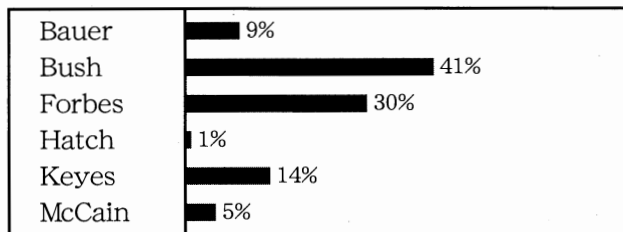
#### <アイオワ州党員集会>

2000年大統領選挙の最初のイベントは1月24日に行なわれたアイオワ州党員集会であった。共和党は年末時点で、9名の候補が名乗りをあげていたが、エリザベス・ドール、ダン・クエールの両氏は撤退宣言をし、この時点で残っていたのが、7氏であった。民主党は早くもこの時点で、副大統領、ゴア氏と、元上院議員、ブラッドレー氏の2氏に絞られていた。〈表2参照〉。アイオワ州党員集会での結果は、例年、最初の国民の審判が下される時として、全国から注目される。もちろんそれ以前に、世論調査はしばしば行なわれており、大方の動向は知ることができるが、党員集会での公式な選挙としては、このアイオワ州が最初であるため、注目されるのだ。その結果は、〈表3〉のとおりであった。

<表3> アイオワ州州党大会結果

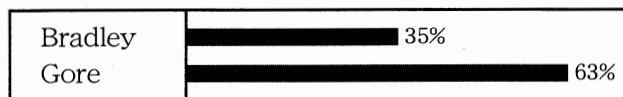
#### 共和党大会

(2143投票区中、2005投票区、  
開票率、97%での結果)



#### 民主党大会

(2136投票区中、2088投票区、  
開票率、98%)



<AP通信による>

共和党アイオワ州党員集会では、本命、ブッシュが勝利を収めたが、対抗、フォークスも善戦している。マッケインは、アイオワ州は放棄して、次のニューハンプシャー州に全力投球している。民主党党員集会では、ゴアがブラッドレーを大きく引き離して快勝しているが、ブラッドレーも、事前の予想に比べ、善戦していると言えよう。アイオワ州党員集会は、共和党、民主党、ともに本命が順当に勝ち進んだが、対抗も善戦しており、まさに勝負はこれから、という結果であった。

#### <ニューハンプシャー州予備選挙>

次いで注目されたのは2月1日、最初の予備選挙が行なわれるニューハンプシャー州である。ニューハンプシャー州の予備選挙は「オープン・プライマリー」と言って、民主党、共和党のいずれかの党に選挙のための登録を行ったものは、自分が登録していない党の予備選挙にも投票することができ、また、登録をしていないもの（支持なし層）も、両党の予備選挙で投票できる、というものだ。ここでは、共和党員はブッシュ候補支持が多いことから、マッケイン候補は、あらゆる集会にこまめに顔を出し、共和党員のみならず、民主党員、支持無しの人達にも広く訴える、という作戦を取った。これが功を奏し、ブッシュ候補に圧勝する。ニューハンプシャー州での得票は、本命、ブッシュ、31%に対し、マッケイン、49%という大差の勝利となる。民主党は、ブラッドレー元上院議員の健闘により、ゴア副大統領対ブラッドレーは、52%対48%と、まさに伯仲、という結果であった。

<表4> ニューハンプシャー州予備選挙結果\*

<共和党> (開票率 91%)	
マケイン上院議員	49%
ブッシュ・テキサス州知事	31%
フォークス・出版社経営	13%
キース元国務次官補	6%
パウアー・社会活動家	1%
<民主党> (開票率 91%)	
ゴア副大統領	52%
ブラッドレー元上院議員	48%

<「朝日新聞」、2000年2月2日、夕刊>

\* 米テレビ報道よりの非公式集計による

ニューハンプシャー州では、今回大統領選における最初の予備選挙ということで、両党とも各候補が、たいへんな力を入れてキャンペーンを行なったことが伺われる。キャンペーンで一番接触があったのは誰かという質問で、有権者は、共和党の、ブッシュ、マッケイン、そして民主党の、ゴア、ブラッドレーを、ともに約3割かそれ以上接触したと回答しており、ニューハンプシャー州での戦いがいかに激しいものであったかが読み取れる。〈表5〉。

特に、テレビのキャンペーンが大きな影響力をもったことが明らかにされている。まず、共和党では、テレビ討論で、どちらが良くやったかという質問をしているが、マッケイン、36%対ブッシュ26%と、マッケインがブッシュを大きく引き離している。民主党では、ゴアとブラッドレーは、ともに30%強で、ほぼ互角であった。〈表6〉。

〈表5〉 キャンペーンで一番接触あったもの

ブッシュ R	34%
マッケイン R	32
ブラッドレイ D	31
ゴア D	27
フォーブス R	26
キー R	11
バウアー R	6
ハッチ R	5

＜共和党候補：R、民主党候補：D＞

＜cbsnews.com＞

〈表6〉 テレビ討論でよくやったもの

＜共和党＞	
マッケイン	36%
ブッシュ	26
キー	12
フォーブス	5
＜民主党＞	
ゴア	34
ブラッドレー	33

＜cbsnews.com＞

ニューハンプシャー州では、有力候補がすべてキャンペーンにたいへん力を入れたことは前述の通りだが、キャンペーンに接したものとそうでないものの支持率の間で大差が見られることから、キャンペーンが大きな影響を与えたことが推測される。すなわち、マッケインの支持率では、45%対33%と、12%もキャンペーンに接したもので、評価が高い。ブラッドレー支持率でも、47%対31%と、ここでもキャンペーンに接したものは、16%も支持率が高い。マッケインの勝利、ブラッドレーの善戦に、ともにキャンペーンが大きな効果を挙げたことが伺われる。

テレビ討論に関しては、57%もの人々が民主党のテレビ討論を詳しく見たという。また、共和党で15%、民主党で12%が、テレビCMによって影響を受けたと報告している。この人達のTV討論での評価はゴアとブラッドレーで、ほぼ引き分けであった。また、この人達の実際の投票も、ほぼ引き分けであった。一方、TV討論を見ていない人達の間では、ゴアとブラッドレーの評価は大差で、ゴア副大統領はブラッドレーを17%もリードしている。ここでもテレビ討論が大きな効果をもったと考えられる。＜CBS News Poll, Jan 15-17, 2001.＞。

＜cbsnews.com 1/25/2000＞。

もちろんテレビ討論の評価は、もともと共和党支持者は共和党候補が良くやったと考え、民主党支持者は民主党候補がよくやったと考える、という傾向があるので、テレビ討論の結果、評価が決まったとは限らない。原因と結果は、本来は不明である。しかし少なくとも同じ政党支持者の中で、テレビ討論での評価に差が出れば、それはやはりテレビ討論の影響と考えてよからう。＜表7＞、＜表8＞は、テレビ討論で、どちらが良くやったかを、登録政党ごとに尋ねた結果であるが、共和党では、ブッシュは共和党支持者（共和党登録者）でも、支持無し（共和党、民主党の、いずれにも登録していないもの）でも、27%、24%と、ほとんど差は見られないのに、マッケインでは、共和党支持者では33%に対して、支持無しでは43%が、マッケインが良くやったと評価している。ということはテレビ討論を通して、マッケインが大きく支持無し層の心を掴んだことが伺われる。＜表7＞。一方、民主党では、ゴアとブラッドレーのテレビ討論での評価は、34%対33%と、まったく伯仲していたが、支持層別に見るとゴアが民主党支持層をしっかりと掌握している（37%対29%）のに対し、ブラッドレーは支持なし層から支持を得ていた（31%対38%）ことがわかる。＜表8＞。



&lt;表7&gt; テレビ討論で誰が一番良くやったと思うか？

	全 体	民主党	共和党	支持無し
パウアー	1 %	—	1 %	1%
ブッシュ	26	—	27	24
フォーブス	5	—	6	4
ハッチ	1	—	1	3
キーズ	12	—	15	7
マッケイン	36	—	33	43
引き分け	6	—	6	5
DK/NA*	13	—	11	13

&lt; cbsnews. com &gt;

\* &lt; Don't know と No Answer, わからない／無回答、の意&gt;

&lt;表8&gt; テレビ討論でどちらが良くやったと思うか？

	全 体	民主党	共和党	支持無し
アル・ゴア	34%	37%	—	29%
ビル・ブラッドレー	33	31	—	38
引き分け	20	19	—	22
DK/NA	13	13	—	11

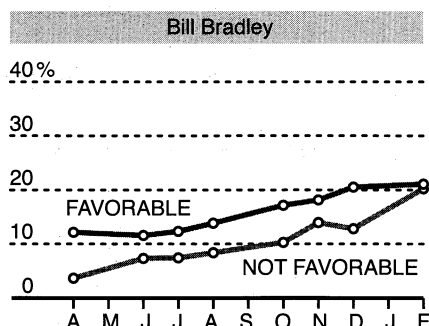
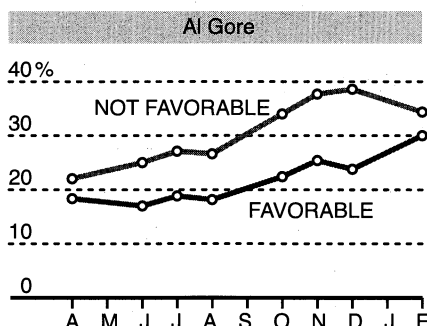
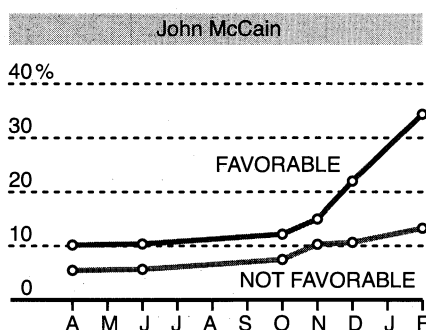
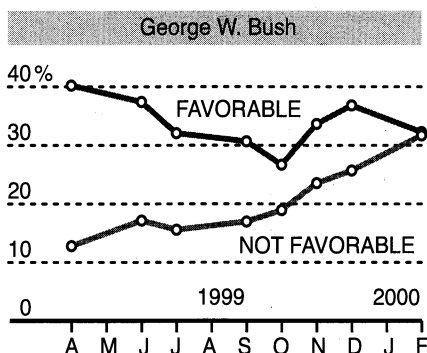
&lt; cbsnews. com &gt;

ニューハンプシャー州予備選挙直前でのニュース・ウイーク誌の世論調査によれば、2月1日に共和党予備選挙に投票する予定の、共和党及び支持無しの支持率は、ブッシュがマッケインに対し挽回、僅かながらリード、という結果である。その前の週の調査では、マッケインがブッシュを42%対34%と大差でリードしていたが、直前の調査ではブッシュ対マッケインは、2人レースでは53%対39%、6人レースでは40%対31%、と、ブッシュが挽回している。ブッシュの減税政策が効いたようだ。税政策では、ブッシュ案支持、47%、マッケイン案支持、35%、となっている。<newsweek.com 1.31.2000>。

アイオワ州、ニューハンプシャー州、デラウェア州の3州で予備選挙が終了した時点での、主要4候補の支持率は、<表9>の通りであった。

<表9> 2000年2月での主要候補への好意度

候補への好意度



<newyorktimes.comより>  
 <2月12-14日、979名の登録者に電話調査。>  
 <The new York Times and CBS News Poll>

1999年4月のスタート時にはブッシュ支持、40%と、ずば抜けていたが、支持率はここのところ下降を続け、いまや30%である。一方、マッケイン候補は知名度も今ひとつで、10%代の支持率であったが、年末より1月、2月と急上昇、そしてニューハンプシャー州での快勝によって、いまや30%の支持率でブッシュ候補とほぼ並ぶまでに追いついている。一方民主党、ゴア候補は、当初、20%台でスタートしたが、年末には40%台に。しかしここをピークとして、その後下降して行き、いま30%台である。こうして、現在、ブッシュ、マッケイン、ゴアの3者が、ほぼ並んでいる。ブラッドレーも善戦しているが、20%台と、他の3候補と比べると、やや差が開いている。こうしてブッシュ、マッケイン、ゴア、3候補が、いずれも支持率30%という大接戦で、スーパーチューズデーを迎えることになる。大統領選挙が今すぐあったら、どちらの候補に投票するか、という調査では、ブッシュ対ゴアでは、現在全国規模で、50%対41%という状況だが、マッケイン対ゴアであれば、マッケインは、支持無しの50%と民主党の21%を確保して、51%対42%で、マッケインの勝ち、となっている。民主党の中では、ゴア対ブ

ラッドレーでは、58%対21%と大差でゴアがリードしている。＜Princeton Survey Research Associates、2/24-25、750 サンプル、インタビューによる＞。

### 3、スーパーチューズデー前夜

#### ——サウスカロライナ、バージニア、そしてミシガン

このような状況の中で、サウスカロライナ州、バージニア州、ミシガン州などの諸州での選挙が行なわれた。この間の主要7州での投票結果をまとめたものが、＜表 10A, B＞である。

＜表 10A＞ 共和党予備選挙序盤戦の状況

	2/8 デラウェア 予備選 オープン	2/19 サウスカロライナ 予備選 オープン	2/22 ミシガン 予備選 オープン	2/22 アリゾナ 予備選 オープン	2/29 バージニア 予備選 オープン	2/29 ノースダコタ 党員集会 オープン	2/29 ワシントン 予備選 クローズド
ブッシュ・テキサス州知事	51%	53%	43%	36%	53%	76%	58%
マケイン上院議員	25%*	42%	50%	60%	44%	19%	38%
フォーブス・出版社経営	20%**	—	—	—	—	—	—
キース国務次官補	4%	5%	5%	3%	3%	5%	3%

＜いずれも CNN 推計による＞ \*放棄 \*\*撤退

＜表 10B＞ 民主党ワシントン州予備選挙

ゴア副大統領	68%
ブラッドレー元上院議員	32%

＜CNN 推計による、開票率、98%＞

共和党選挙におけるこれらの結果からまず明らかなことは、マッケインはミシガン州、アリゾナ州で勝利、またサウスカロライナ州、バージニア州で敗北しているが、善戦している。すなわち、共和党員以外も投票できるオーブンプライマリーで、マッケインが善戦しているということだ。共和党員しか投票できないクローズドプライマリーのワシントン州では、20%の大差で敗北している。この点を、もう少し詳しく、サウスカロライナ州、バージニア州、ミシガン州の3州でみたものが、＜表 11＞である。

<表 11> スーパーチューズデー直前での主要3州における共和党予備選挙結果\*

サウス カロライナ	ヴァージニア	ミシガン		サウスカロライナ		ヴァージニア		ミシガン	
				Bush	McCain	Bush	McCain	Bush	McCain
61%	63	48	共和党	69%	26	69%	28	66%	29
30	29	35	支持政党無し	34	60	31	64	26	67
9	8	17	民主党	18	79	11	87	10	82
61	55	45	保守的	65%	29	69%	27	60%	31
29	33	37	中立	37	59	35	62	33	64
10	12	17	リベラル	34	63	27	69	16	78

< newyorktimes.com 3/1/2000 >

\* 選挙当日の Voter News Service による出口調査による。AP 及び MSNBC・CNN より。

これらの3州の共和党予備選挙を通じて、2つの興味深い点が見られる。政党支持（Party Id）と、保革イデオロギー（Political Philosophy）による差異である。

まず、政党支持について。ブッシュは共和党員のなかで勝利している。一方、マッケインは民主党員と支持無しから、かれらが共和党予備選挙で投票できる限りは、支持を得ている。従って各州での共和党員の比率の違いが、各州での選挙結果の違いを引き起こしている。

バージニア州、サウスカロライナ州、ミシガン州の3州の場合を見て見よう。いずれもオープンプライマリーだ。ブッシュはバージニア州とサウスカロライナ州で勝利、マッケインはミシガン州で勝っている。しかし、これら3州のいずれにおいても、ブッシュは共和党員の2/3を獲得している。

違いは各州の共和党員比率なのである。バージニア州、63%、サウスカロライナ州、61%、そしてミシガン州は48%である。その結果、共和党員の多いバージニア州とサウスカロライナ州でブッシュが勝利し、マッケインは共和党員の少ないミシガン州で勝った、ということがわかる。マッケインはミシガン州で52%を獲得してブッシュに勝利しているが、このうち35%は支持無しから、そして17%は民主党員から、獲得しているのである。

一方マッケインは3州の全てに於いて、支持無しの2/3、民主党員の8割から9割と言う圧倒的支持を得ている。オープンプライマリーがマッケインに有利に働いていることは明らかだ。

次に、保革イデオロギーについて。ここでも、ブッシュは3州のすべての予備選挙で、保守から支持を得、マッケインは中立とリベラルから支持を得ている。すべての州で、ブッシュは保守の6-7割を獲得、マッケインは中立とリベラルの6-7割を確保している。これらの傾向は3州を通じて驚くほど一貫している。そしてここでも各州の保守の比率が違うため、その

結果、違う勝者敗者を生んでいるということだ。

サウスカロライナ州では、投票者の61%、バージニア州では55%、しかしミシガン州では45%が保守とっている。ミシガン州ではマッケインは54%を獲得したが、中立、37%、リベラル、17%である。オープンプリマリーだからこうなる。こう考えると、3月7日のニューヨーク州、3月14日のフロリダ州など、スーパーチューズデーでは、いずれもクローズドプライマリーなのでずっとプッシュに有利になることだろう。〈newyorktimes.com 3/1/2000〉。

#### 4、スーパーチューズデー

〈スーパーチューズデーとは〉

スーパーチューズデーは、1988年の大統領選挙、プッシュ、デユカキス戦のときに生まれた。そもそもスーパーチューズデーは、二つの目的によって始められた。一つは、南部の大口議員、当時の上院軍事委員会委員長、サム・ナンらを担ぎ出し、南部から久しぶりに大統領を出したいということであった。もう一つは、前述のように、序盤ではアイオワ州、ニューハンプシャー州といった弱小州が全米の注目を集め、終盤戦ではニューヨーク州、カリフォルニア州、そしてミシガン州、オハイオ州といった、東部、中西部の大票田の結果によって、予備選挙の最終的結果が決まり、両党の大統領候補が決まる。南部諸州は、人口から言っても、産業、GNPなど、すべての点から言っても、アイオワ州、ニューハンプシャー州などとは比べ物にならない巨大州である。むしろ、東部、中西部に匹敵する力を持っているのに、予備選挙では途中に入っていて霞んでしまっている。いまこそ、南部諸州の力を見せよう。予備選の結果は南部の意思によって決まる、と言うことを見せつけよう、ということで始まったものである。

このときは3月8日、南部14州がすべて参加した。テキサス、フロリダ、ジョージア、テネシーなどのデープ・サウス、8州、ケンタッキー、ミズリー、オクラホマ、バージニアなど、ボーダー・サウスが6州、すべての14州で、共和党、民主党、ともに予備選挙を断行した。このスーパーチューズデーで選出される代議員の数は、デープ・サウスで民主党の51%、共和党の59%、ボーダー・サウスで、民主党の31%、共和党の30%が選出された。いかに南部の重要性が甚大なものであったかが伺われる。

こうして行なわれたスーパーチューズデーの結果はどうであったか。第1の目的についてはサム・ナンが軍事委員会委員長の激職にありその任務に専念したい、と言う理由で辞退した結果、実現しなかった。サム・ナンの人気は、南部では絶大なものであったが、全米では今ひとつ、というのが実情であった。現実主義者のサム・ナンはそれを見抜いて辞退したものと考えられている。

第2の目的については完全に達成されたと言えよう。スーパーチューズデー直前までは、共和党ではジョージ・ブッシュとボブ・ドールの大接戦、一騎打ち、という状況であったが、こ

のスーパーチューズデーでブッシュは南部14州の全州を制覇、ここにブッシュ独走態勢が確立された。すなわち共和党の候補者は南部の意思によって確定したのである<鮑戸、1989>。

#### <第1スーパーチューズデー>

今回は2度のスーパーチューズデーが計画された。本来の南部、テキサス州、フロリダ州などで、スーパーチューズデーが3月14日に行なわれる予定であったが、その1週間前に、カリフォルニア州、ニューヨーク州などの巨大州が割り込んできた形となった。こうして第1スーパーチューズデーは3月7日、そして南部の第2スーパーチューズデーは3月14日と、2度のスーパーチューズデーが行なわれることになった。

従って、1988年にスタートしたときの、南部中心のスーパーチューズデーとは、全く様相を異にするもので、今回のスーパーチューズデーは、特に第1スーパーチューズデーは、単なる“巨大諸州の予備選挙の前倒し”と言うものであった。

それにしても、性格こそ異なるが、このスーパーチューズデーで、特に第1スーパーチューズデーで、<付表1>のごとく、共和党では13の諸州で、民主党も15州と米領サモアで、予備選挙、党員集会を行い、いずれも指名獲得に必要な代議員数の約6割が決まるという、文字通り“天下分け目の決戦”であった、と言う点では1988年と共通していた。<「朝日新聞」、2000年3月7日、朝刊、より>。特に注目されたのは、カリフォルニア州、ニューヨーク州、オハイオ州、マサチューセッツ州などの大票田での結果であった。<表12>。

<表12> スーパーチューズデーの主な州での代議員数

	共和党	民主党
カリフォルニア州	162	367
ニューヨーク州	101	243
オハイオ州	69	146
マサチューセッツ州	37	93
コネティカット州	25	54
ミズリー州	35	75
指名に必要な過半数	1034	2170

<「朝日新聞」、3月7日、朝刊>

さて、第1スーパーチューズデーの結果について見て行こう。今回参加した諸州は、ニューヨーク州、メイン州、ヴァーモント州、マサチューセッツ州、コネティカット州などの東部諸

州と、カリフォルニア州、オハイオ州など、計16州であった。特に注目をあびたのは、ニューヨーク州と、カリフォルニア州だ。ニューヨーク州とカリフォルニア州は例年なら、予備選挙の終盤戦で最期の決着をつける役割の大票田である。それが今回は早くも前倒ししてきたと言うことだ。これら巨大州も、のんびりしていると自分達の州の予備選挙が始まる前に、決着がついてしまう可能性がある。そうなると何の発言権もないうちに大統領候補が決まってしまう。そこで早くも前倒ししてきたと言うわけだ。

事前の予想は<表13>の通りであった。すなわち、共和党では、ブッシュ、善戦。カリフォルニア州、ニューヨーク州、いずれもでブッシュ6%のリードでやや有利。オハイオ州はブッシュが取った模様。ただし、マサチューセッツ州はマッケインがほぼ獲得、コネティカット州は僅かにマッケイン有利と、東部諸州ではマッケインにも勝機あり。しかし民主党は、いずれもゴアの圧勝、と言う予想であった。<「朝日新聞」、2000年3月7日、より>。

<表13> スーパーチューズデー直前での主要諸州での支持率

	共和党		民主党	
	ブッシュ	マッケイン	ゴア	ブラッドレー
カリフォルニア**	27	21	28	10
ニューヨーク	45	39	62	22
オハイオ	56	32	71	19
マサチューセッツ	30	59	—	—
コネティカット	41	43	—	—

<「朝日新聞」2000年3月3日、朝刊>

\* 5日発表のロイター／MSNBCなどの世論調査結果。

\*\* カリフォルニアは両党並べて聞いたもの。

実際の結果を見てみよう<表14>。まずカリフォルニア州では、ゴア対ブラッドレーは81対18と、予想を遥かに上回るゴアの圧勝であった。ブッシュも僅かに有利という予想であったが、マッケインを60対35という大差で破ることになった。それにしても、81%のゴアには、遥かに及ばない状況であった。

<表 14> スーパーチューズデーでの主要6州での投票結果

	共 和			民 主	
	プライマリ	ブッシュ	マッケイン	ゴア	ブラッドレー
カリフォルニア	CL	60	35	81	18
ニューヨーク	CL	51	43	65	34
コネティカット	CL	46	49	55	42
オハイオ	OP	58	37	73	25
マサチューセッツ	OP	32	64	60	38
ミズリー	OP	58	35	65	34

< CNN 集計による > CL: クローズドプライマリ OP: オープンプライマリ

この背景には1994年に可決した州法「不法移民締め出し提案」に対するヒスパニックの恨みがあると言われる。当時の知事が共和党のウイルソンであった。その後違憲判決がでたのを控訴せず廃案に持ち込んだのが、ゴア支持の民主党、デービス現知事であり、こうしてゴアが圧勝したと考えられている。カリフォルニア州でのヒスパニックの人口はいまや42%、この移民法が、眠れる巨人を目覚めさせてしまったということだ。

今回のスーパーチューズデーでもっとも接戦と言われたのが、ニューヨーク州共和党でのブッシュ・マッケイン戦であった。選挙報道も最後まで混戦を伝えていたが最終的に51%対43%で、ブッシュ候補が逃げ切った。ニューヨーク州はユダヤ人票、黒人票を無視して勝利はあり得ない。リベラルなマッケインにとって、カリフォルニア州での大敗が予想される中、ニューヨーク州は最後の砦であった。ニューヨーク州は通常、予備選挙は終盤戦のため、党本部も統制が取れ、結束して選挙に当たるため、あまり混乱は無かった。しかし今回は、ニューヨーク州知事及び州党本部はブッシュ支持、それに対してニューハンプシャー州、ミシガン州で連勝して勢いに乗るマッケイン氏が激突した。最後の段階で、州党本部の有力幹部もマッケイン支持に回り、足並みが乱れた。最終的にはブッシュが豊富な資金に物を言わせて大量の広告を投入、そして州党本部を何とかまとめて逃げ切った、という結果であった。

マサチューセッツ州ではマッケインが予想通り完勝、コネティカット州も予想通り僅差で勝利、と言う結果であった。オープンプライマリで支持無し票や民主党の支持を得て善戦したマッケインだが、今回はオープンのマサチューセッツ州では64%対32%と完勝したが、同じオープンのオハイオ州とミズリー州で、20ポイント近い差で大敗してしまった。何と言っても、このカリフォルニア州とニューヨーク州での結果が、スーパーチューズデーでの勝敗を、大きく決することになった。こうして、本命、共和党のブッシュ、民主党のゴアが、勝利することはほぼ確実となった。<「朝日新聞」、3月7日、3月9日、朝刊、参照>。



こうして、巨大諸州が前倒しをしたため、例年なら勝負はこれからという3月7日という早い時期に、両党の大統領候補はほぼ決定してしまった。例年だと、これから予備選挙の中盤戦、そしてニューヨーク州、カリフォルニア州、オハイオ州、ミシガン州などの巨大州での終盤戦へと盛り上げ、そこでようやく決着がつき、7月、8月の全国党大会へとつなげて行くのだが、今回は早くも序盤戦で決着がついてしまった。事実、3月9日の時点で、共和党、マッケイン、民主党、ブラッドレーが、ともに撤退宣言。ここに共和党、ブッシュ、民主党、ゴアに、両党の大統領候補が確定する。

これから7月、8月の全国党大会まで4ヶ月、どうやって国民の関心を繋ぎとめておくことができるか、また選挙陣営の結束を維持して行くにはどうしたらいいか、共和、民主、両党、頭を抱えたことであろう。

#### <スーパーチューズデーでの勝因・敗因>

スーパーチューズデーで共和党に起こったことは、今までの予備選挙で起こったことと同じであった。詳しくは、<付表2> 及び、<付表3>を参照されたい。

これを要約すれば、共和党員はブッシュに、支持政党無しはマッケインに、そして、保守はブッシュに、リベラルと中立 (Center) がマッケインに、投票したのだ。支持政党無しで共和党の予備選挙に投票した人達が今度の選挙で大きな役割を果たした。

例えば、マッケインはメイン州を除く全てのニューイングランドの諸州で勝利した。ここでは支持無しが、全投票者の31%を占めた。マサチューセッツ州など投票者の50%以上が支持無しで、マッケインは楽勝した。ニューヨーク州では共和党に登録したものだけが投票でき、支持無しというものは20%しかいなかったが、ここではブッシュが勝利した。

宗教は今回はあまり大きな影響は無かった。マッケインの宗教保守派攻撃もあまり影響はなかったようだ。これらはいずれも VNS (Voter News Service) 社の出口調査による。

民主党ではゴア副大統領があらゆる階層、集団で、勝利した。特に、女性、黒人、労働組合員で、また、白人、高学歴層、そしてあらゆるイデオロギー層で、支持を得た。ゴアの“現在の民主党政権に国民は満足している”という訴求が受けたのであろう。民主党予備選挙に投票したものの4分の3が、クリントン大統領はよくやっている、と評価している。

州によって大きく食違うのはクリントン大統領の評価だ。ジョージア州では61%が良いイメージをもっているのに、コネティカット州では52%が良くないイメージを持っている。

また共和党支持者では候補者の指導力と人柄がもっとも重要視したというのに、民主党では候補者の政策がもっとも重要だと答えている。オハイオ州の民主党では候補者の政策上の立場が重要としたものが52%に対して共和党では55%のものが人柄と指導力がいちばん重要だと答えている。両党候補の特徴が良く出ていると言えよう。< CBS News exit poll による >。

3月8日のニューヨークタイムズは以下のように報じている。スーパーチューズデーでの投票はブッシュ対マッケインは54%対40%と大きく開いた。オープンプライマリー（どこかの党に登録した人は、どの党の候補者にも投票できる）では、マッケインは主に民主党支持者および支持無しから支持を得ていたが、マッケインの伝統的共和党への批判はあまり功を奏さず、共和党支持者のなかでは2:1でブッシュが支持されている。すなわち、ブッシュ、63%対マッケイン32%であった。

ブッシュとマッケインの獲得した支持者は、全国レベルでも、はっきり異なっており、ブッシュ支持者の82%が共和党、2%が民主党、16%が支持無しであったのに、マッケインの方は、共和党からは56%、民主党から8%、支持無しから37%という結果であった。

大統領に必要な資質について、共和党員は、政策より、指導力と人柄で選んだといっている。54%は指導力、42%が政策、と答えている。

全国レベルでも、ブッシュは政策が大切という人達のなかで2:1で勝利している。さらに指導力が大切という人達の中でも49%対47%と、ブッシュが僅かながらリードしている。ブッシュは、大統領になるには経験が十分でないとして批判されたが、全投票者の71%がブッシュは大統領を勤めるの十分な知識を持っている、としている。ブッシュの減税政策も効いているようだ。減税は重要だと答えている共和党予備選挙投票者中、66%がブッシュを支持している。

ゴア副大統領はあらゆる層でブラッドレーを大きく引き離している。クリントン大統領が良くやっていると言うものは82%だが、そのうちの74%がゴア副大統領を支持している。クリントンを評価しない民主党は少数派だが、その人達の中ではブラッドレーは58%対36%でゴア副大統領の支持を上回っている。しかしクリントンの個人的過ちについて、ゴア副大統領に責任があると考えるものは少ないようだ。クリントンが嫌いという39%のなかでも、ゴア副大統領を支持するものが53%で、ブラッドレーの44%より多いという結果である。

< [newyorktimes.com](http://newyorktimes.com) 3/9/2000 >

## 5、 ボランティアとニュース報道

こうして早くも3月上旬に、両党の大統領候補がほぼ決まってしまった。両陣営にとって最大の課題は、こうして余りに早く大統領候補が決定してしまったために、選挙陣営が緊張を失い、各陣営の活動水準が低下してしまうということであった。例年だと、共和党陣営では、一、二の候補が、民主党陣営では数人の候補が、6月末の予備選挙の終盤戦まで、最終候補者への生き残りを賭け、互いに凌ぎを削って戦うため、時にはしこりも残るが、活力は維持される。そこで7月、8月の全国党大会で候補者が一人に絞られると、敗れた選挙事務所のリーダーや一般ボランティアたちは、絞られた唯一の候補者の所へ移って党として応援して行くか、または選挙運動そのものから撤退して行く。しかし今回は、マッケインの選挙事務所もブラッド

レーの選挙事務所も、3月の時点で閉店し、ブッシュ陣営とゴア陣営だけが残ったことになる。したがって、いつもなら、全国党大会後に起こる、各候補の応援団が合併する際の軋轢はないことだろうが、当面の両陣営での選挙運動での活力は、大きく低下することは明らかだった。

メディア政治、ニュー・ポリティックスの傾向を助長する、アメリカの選挙のもう一つ重要な側面として、こうしたボランティアの伝統を上げることが出来よう。すなわち、選挙運動への有権者の参加は、通常、二つの形態を取る。一つは、ボランティアとして、選挙運動を直接手伝う。もう一つは、直接、選挙運動を手伝うことは出来ないが、その分、献金によって、候補者を支援するという方法である。

第1のボランティアには、さまざまなレベルがある。もっとも専門的な参加は、選挙陣営の正規の職員として、選挙運動本部にいて、選挙参謀やトップ・ブレンと直接連絡を取りながら、各地でのラリー（候補者演説会）のスケジュール調整、当日の準備、運動員の手配、クルマの手配、取材陣へのサービスなど、作戦を実行する総監督、さまざまなリーダーたちである。こういう人たちには、時には一年間会社を休職したり、または三、四ヶ月休暇をとったり、なかには一旦退職したりして、専業で選挙運動に参加する者もいる。もちろんほとんどが無給である。

このようなボランティアのなかには、支持した候補者が当選した時には、大臣（長官）、補佐官、各官庁の局長、部長クラスに、抜擢されるものもいる。言うまでもなく、大統領の政党が変わったときには、こうしたトップクラスの人事が約千五百人、課長クラスまで含めると約六千人が、入れ替わる。こうしたポストを狙って、選挙運動に参加するものも多い。

しかし一般のボランティアは特にそのような野心はなく、自分が本当に当選して欲しいと思う人を応援するために、一年、あるいは半年、会社を休んで、時には会社を辞めて、選挙運動に参加し、選挙が終われば元の会社に戻って行く。または新しい職場を探して就職して行く。もちろんこれらはすべて原則として無給である。日本では考えられない状況であろう。キリスト教文化に基づくボランティアの伝統がこのような政治参加の基礎になっているのであろう。

参加の第2の形態である献金も、選挙運動に欠かせないものだ。特に利害関係もなく、コネもないが、この人に是非当選して欲しいという候補者に対して、かなり貧しい庶民でも、百ドル、五十ドルという小切手を送る。政府からの各候補者への選挙運動補助金は、こうして各候補が集めた寄付金と同額が給付される、という制度も、こうした献金を活性化させる良いシステムであろう。

アメリカにおける「メディア政治」の一因が、実はこの参加制度と密接に関連していることも、見逃してはならない。すなわちアメリカでは、テレビ、新聞などの大メディアで、トップランナーと報道されることが、極めて重要である。各陣営は何とかして自分の陣営の候補者がトップランナーである、と報道してもらうよう、あらゆる努力をする。なぜなら、トップ

ランナーと報道される候補者に、ボランティアも、献金も、集中するからである。特に役職などの実利実益のためでなくても、やはり一番有力な候補者を応援したいというのが人情だ。勝ち馬に賭けるという心理であろう。ボランティアたちは、同じ政党の、同じ地域の、有力候補の事務所に移ってゆく、というのが、良くあるパターンである。献金も同様で、トップランナーのところに集中する。こうして大物候補者が、新人のトップランナーなどに敗れてしばしば脱落して行くことになる。そこで何とかしてわが陣営の候補がトップランナーであるという印象を与えるには、トップランナーと報道してもらうためには、どうしたらよいかと考え、そのためにキャンペーン戦略を練ることになる。有権者のためのキャンペーンではなく、メディアのためのキャンペーンとなって行くわけだ。メディア政治、メディア選挙といわれる所以である。＜詳しくは、鮑戸、1989年、参照＞。

## 6、メディア政治時代の選挙 ——全国党大会

余りに早い決着に、しばらく共和、民主、両陣営ともに緊張を失い、国民の選挙、政治への関心も急速に低下していった。次のビッグイベント、全国党大会が緩んだ箍を引き締める唯一のチャンスであった。両党の全国党大会は、かつてのように、全国から集まったさまざまな利益代表がひざ突き合わせてネゴシエーションしつつ、実質的に大統領候補を決定するための場ではなく、すでに予備選挙で確定した両党の候補者を、テレビ、そして新聞、週刊誌などのあらゆるメディアで報道してもらい、PRしてもらうためのメディアイベントとなった。＜鮑戸、1989年、ほか、参照＞。まずは共和党全国党大会から見てみよう。

### ＜共和党全国党大会＞

共和党の全国大会は、7月31日—8月3日まで、フィラデルフィアで開催された。4日間のプログラムをまとめると、以下の通りである。＜「The Washington Post」、7月31日、朝刊、2000 Republican National Convention Preview、より＞。

初日、7/31（月）のテーマは「教育」であった。すべての子どもが適切な教育を受ける権利があるという視点から、教育の重要性、そして平等な社会を訴える。主要な登場人物は、W・ブッシュ夫人、ローラ・ブッシュが教育の重要性と家族と子どもへの愛の重要性を訴える。そして今一番の人気を誇る、黒人退役将軍、コーリン・パウエルが、平等な社会を訴え、トリを勤める。

第2日、8/1（火）。この日のテーマは「安全」である。家庭の平和と、国家の安全を確保する「強いアメリカ」を訴える。主要な登場人物は、まず、ブッシュ候補の外交政策アドバイザー、スタンフォード大学教授、コンドレッツァ・ライス女史が強いアメリカのための外交方針を訴える。そして、前内閣官房長官（former Cabinet secretary）、エリザベス・ドールと、

予備選挙で戦った最強の競合者、アリゾナ州選出、上院議員、ジョン・マッケインが、ともにブッシュを支持し、共和党は一丸となって選挙戦を戦って行くことを誓い、一致の党であることを示す。

第3日、8/2(水)。テーマは「繁栄と保障」。この日の主役は、中小企業主、労働者など、一般庶民が動員される。アメリカの繁栄をたたえ、大規模な減税政策を訴え、そして社会保障の充実を約束する。そして最後はリチャード(ディック)・チェイニーの、副大統領候補受諾演説で締めくくる。

第4日、8/3(木)、最終日。この国を一つに結びつけ、すべてを実行する、大統領の強力な「リーダーシップ」を謳い上げる。この日のハイライトはもちろん、ジョージ・W・ブッシュの大統領候補受諾演説である。例によって、全員が総立ちとなり、拍手拍手の嵐、そして赤青白の風船が舞い上がり興奮の渦の中に、4日間の党大会の幕を閉じる。これが共和党の演出であった。

今回の党大会では通常の大会にしばしば見られる相手候補への中傷・誹謗は、ほとんど見られなかった。しかし、クリントン大統領の、“女性との不適切な関係”によって著しく傷つけられた大統領の威信を取り戻すことこそ最大の課題であり、それは政権交代によってのみ回復しうる、クリントンの副大統領を勤めたゴア氏では不可能だ、という主張は、終始徹底して訴えられた。これが4日間を通じて、ボデーブローのように徐々に効いていったものと思われる。そして止めが、ブッシュの大統領候補の受諾演説の大成功であった。よく準備されたその演説は、出色の出来栄えと評価された。

#### <民主党全国党大会>

2週間後、今度は民主党の全国党大会が、8月14日から17日まで、ロスアンゼルスで行なわれる。19%も引き離された民主党にとって、巻き返しの絶好のチャンスである。以下に、党大会の様子を要約しておこう。<「The Washington Post」、8月14日、朝刊、2000 Democratic National Convention Preview、より>。

初日、8/14(月)のテーマは、「繁栄と約束」。8年間の民主党政権が築き上げてきた繁栄は、今後も必ず続くと、民主党とクリントン大統領の実績を高らかに謳いあげる。この日の主役は、クリントン大統領。そのほかヒラリー・クリントンを含めて女性上院議員及びその候補者が数人壇上に上がり、女性の活躍を誇示する。また「普通の人」たちも多数壇上に上がって民主党政権によってもたらされた繁栄を謳歌する。

第2日、8/15(火)、テーマは「いまだ到達していない新しいゴール」。もしいま、アメリカのリーダーが正しい選択をするならば、われわれはこんなにいろいろな素晴らしい目標を達

成することができると、さまざまな政策を提示する。この日の主たる登場人物は、ゴアと最後まで予備選挙を戦ったビル・ブラッドレー。そして民主党と言えばケネディー家。ケネディー家からは、ジョン・F・ケネディ（JFK）の息女、キャロライン・ケネディー・シュロスバーグ、エドワード・M・ケネディー、上院議員。そしてトリは、以前、2度、大統領候補に立候補した黒人リーダー、ジェッシー・ジャクソン。

第3日、8/15（水）のテーマは、「闘士、アルバート・ゴア」。大統領候補、アル・ゴアの人となりと業績を、家族、知人、友人達が褒め上げ、紹介する。この日の主役は、ゴアの長女で、選挙戦ではゴアを助けて大活躍した、カリナ・ゴア・シフ。そしてトリは、ジョセフ・I・リーバーマンによる、副大統領候補の受諾演説。

第4日、8/16、（木）。テーマは、「アル・ゴアの将来ビジョン」。この日のハイライトは、ゴア夫人、ティッパー・ゴアによる夫の紹介と、引き続き、アル・ゴアの大統領候補受諾演説。民主党のゴアこそが、労働者階級の人々の生活を改善するために戦うものだ、と宣言する。ブッシュ候補の労働者階級や恵まれない人々のために尽力する「思いやりの保守主義」という政見に対して、民主党こそが本来、労働者のための政党であり、自分こそがそれを断行すると訴える。民主党の演出も、見事であった。ゴア候補の経験、有能さを存分に誇示するとともに、ゴアこそが次の大統領に相応しい人物と訴える。

こうして共和党、民主党の2大政党による最大のメディアイベントが終了した。共和党は従来通りの党大会を無難にこなしたと言えよう。特に最終日のブッシュ候補の大統領受諾演説は予想以上の出来栄と絶賛されたもので、この4日間のビッグイベントを締めくくりにふさわしいものであった。ブッシュ候補の支持率は、共和党・民主党の共同調査、タラズグループ調査によれば、この共和党大会直後、一気に49%に上昇、ゴア候補の支持率は逆に7%低下、両者の差は、今期最大の、18%にまで達した。＜表15＞。

それに対して民主党の党大会は、いつもの大会とは一味違った演出であった。まず第一に、ゴア候補は元新聞記者であり文筆には自信があったのであろう、大統領候補受諾演説はすべてプロのスピーチライターに任せることなく、自分で書くことにした。政策中心にしっかりと自分の政策を地道に訴えることに専念した。直前の共和党大会でクリントン現大統領の女性との「不適切な関係」によって失われたアメリカ大統領の威信というボディブローが効いていたこともあろう。民主党大会直後の評価は、共和党大会に比べ、やや盛り上がり欠ける、というものであった。同じくタラズグループの調査でも、あまり大きな変動は見られず、ゴア、2%上昇、ブッシュ、2%下降、という程度で、共和党大会直後の激動に比べると、影響は遥かに小さかったことが分かる。＜表16＞。

その他の世論調査の結果も、民主党大会直後の状況は、ゴアがかなり追いつけたが、ブッシュ

に追いつくまでには至らない、というのが大方の結果であった。しかし党大会後、しばらくして、徐々に民主党、ゴアに対する評価が上昇、ニューヨークタイムズ・CBSの世論調査では、共和党大会直後、16%もブッシュがリードしていたが、民主党大会直後では、ブッシュ、42%に対し、ゴア、43%と、ほぼ一線に並んだ、という結果であった。＜8/18－20に行なわれたニューヨークタイムズ・CBS調査による＞。いずれにしても、ここで両候補まったくの互角、試合ははじめから仕切りなおし、という大接戦となった。

＜表 15＞ 共和党全国党大会中の支持率の動き

	7/31/00	8/1/00	8/2/00	8/3/00
Bush	48%	49%	47%	49%
Gore	38%	36%	34%	31%
Nader	3%	4%	6%	6%
Buchanan	1%	1%	2%	2%
Undecided	11%	10%	12%	12%

＜Terrance Group 調査より＞

\* 8/13－17/ 2000, 毎日 500 人の registered “likely” voters を調査。

＜表 16＞ 民主党全国党大会中の支持率の動き

	8/15/00	8/16/00	8/17/00	8/18/00
Bush	47%	48%	48%	45%
Gore	38%	37%	37%	40%
Nader	4%	4%	3%	3%
Buchanan	1%	2%	2%	1%
Undecided	9%	9%	10%	10%

＜Terrance Group 調査より＞

\* 8/13－17/ 2000, 毎日 500 人の registered “likely” voters を調査。

## 7、キャンペーン期とメディア報道 ——テレビ討論

3回にわたるテレビ討論の経過については、すでに詳しく検討したので本稿では割愛し、ごく概略をまとめておくにとどめたい。＜鮑戸、2001B、参照＞。

第1回、テレビ討論は、10月3日、ボストン、マサチューセッツ大学にて、第2回テレビ討論は、10月11日、ノースカロライナ州、ウインストンセーラム、ウエイクフォレスト大学にて、そして、第3回テレビ討論は、10月17日、ミズリー州、セントルイス、ワシントン大学にて、いずれも東部時間、午後9時から10時半まで90分にわたって行なわれた。司会はいずれも、米公共放送PBSの報道番組「ニュース・アワー」のホスト、ジム・レーラー氏。全米で約6百万人の有権者が、テレビに釘付けとなった。

第1回テレビ討論では、ゴアが政策論争ではややリード、しかし人物については、ブッシュにより好感がもたれた、と言う結果であった。全体として、ブッシュ、ゴアの、どちらが良くやったかという点では、ABCニュース調査では46%対36%で、ゴア、CNN/USAToday/Gallup調査では、48%対41%でゴア、という結果であった。いずれにしても第1回討論では、ゴア勝利、と言う結果であった。

異変はこの直後に起こる。テレビ、新聞などのマスコミ論調で、テレビ討論でのゴア候補の態度に、批判の声があがる。特にブッシュが話しているときに相手をからかうような表情で、肩をすくめて見せる態度が、いかにも傲慢であった、というのだ。ブッシュがゴアの言うことを一生懸命頷きながら聞いている誠意ある態度と対照的だ。ゴアは有能だが、大統領になったら傲慢で、専制的になるのではないかとまで言われた。テレビでは連日、ゴアが肩をすくめる映像が放送された。こうして討論直後のゴアがやや有能で勝利、という評価から、ゴアは有能、ブッシュは人柄がよい。差し引き、ブッシュがやや良い、という評価に変わっていった。

世論調査の結果も、この状況を良く捉えている。NBC調査では、両候補者の有能さについて調査しているが、「大統領に相応しい知識と経験」では、ゴア、49%、ブッシュ、24%と、ゴアが大きくリードしているが、CNN／USA Today／Gallup調査の、テレビ討論を見て「より好意的な印象」をもった、というものの比率は、ゴアが27%に対して、ブッシュが34%、となっている。＜「The Washington Post」、2000年10月5日、より＞。

こうして、第2回テレビ討論直前の両候補の支持率は、ブッシュがゴアを再び追い越した。第2回討論直前の10日に発表されたCNN／USA Today／Gallup調査では、ブッシュ氏支持が47%で、ゴア氏の44%をわずかに上回った。まさに、メディアがテレビ討論を評価する「枠組み」を変更したために、有権者の候補者評価の基準が変化してしまい、そのことで両者への評価の優劣が逆転してしまった、という、メディアの「フレーミング効果」<sup>3</sup>が、観察された、といえよう。

第2回テレビ討論は、この状況を受けて、ゴアがたいへん紳士的に討論を行なった。しかしそのため、ゴアの鋭い論法は影を潜め、全く迫力のないものとなった。結果は、ブッシュ勝ち、ということになった。直後に行なわれたCNNテレビの電話調査の結果は、ブッシュ、49%対ゴア、36%で、ブッシュの勝ち、ということになった。ABCテレビの調査でも、46%対30%



で、ブッシュの快勝であった。＜asahi.com. 10/12/2000＞。

第3回テレビ討論では、今度はゴアも必死の反撃に出る。ブッシュも切り返して大激論。両氏は減税や社会保障、教育政策などで相手の姿勢を攻撃する激しい応酬を展開。しかし結果はほぼ互角であった。直後に実施されたABCテレビの調査では、テレビ討論で、ゴア、ブッシュ両候補のどちらが勝ったか、との質問に、ともに41%と、まったくの互角であった。CNN調査ではゴアが小差で優勢となった。いずれにしても、第3回討論では両者はほぼ互角、という結果であった。＜「日本経済新聞」2000年10月18日、朝刊、より＞。

＜表17＞ は、ギャラップ調査の結果であるが、これらの事態と関連したさらに興味深い事実を明らかにしている。

＜表 17＞ 候補者支持と政党支持の変化

	共和党支持	支持なし	民主党支持	大統領候補支持率	
9/29-10/1:	34%	31%	35%	Tie	
9/30-10/2:	33	31	36	Gore	+2%
10/1-3:* <sup>1</sup>	33	29	38	Gore	+8
10/2-4:	30	33	37	Gore	+11
10/3-5:	34	32	34	Gore	+1
10/4-6:	38	32	30	Bush	+7
10/5-7:	39	31	31	Bush	+8
10/6-8:	37	30	32	Bush	+8
10/7-9:* <sup>2</sup>	35	31	34	Bush	+3

＜ Gallup Tracking Likely Voter Sample による政党支持率＞

\*1: 10/3、第1回TV討論    \*2: 10/11、第2回TV討論直前

まずこの調査より第1回テレビ討論と第2回テレビ討論の間に不思議なことが起こっていることが読み取れる。と言うのは、第1回テレビ討論の直前ではブッシュ、ゴアの両候補がほぼ互角（tie）であった。それが第1回討論の直後にゴア候補の評価が上昇、ゴア候補、8%から11%のリードとなる。明らかに第1回テレビ討論で「ゴア勝ち」という評価と一致している。

ところがその後、ブッシュが追いつき、追い越し、3日後から5日後にかけて、今度はブッシュが7%から8%リードとなる。マスコミ論調でゴア候補が攻撃され、ゴアの有能さより、ブッシュの人柄に軍配が上がった、という結果と対応していると言えよう。

ここでさらに注目されるのは、この間での政党支持率の変化である。9/29から10/1では共和党対民主党は、34%対35%と全く互角であったものが、10/3、10/4あたりで、民

主党支持が上昇、共和党支持が下降、民主党支持率が、5－7%リードとなっている。ここで、ゴア候補のリードも、8－11%と、最大となっている。

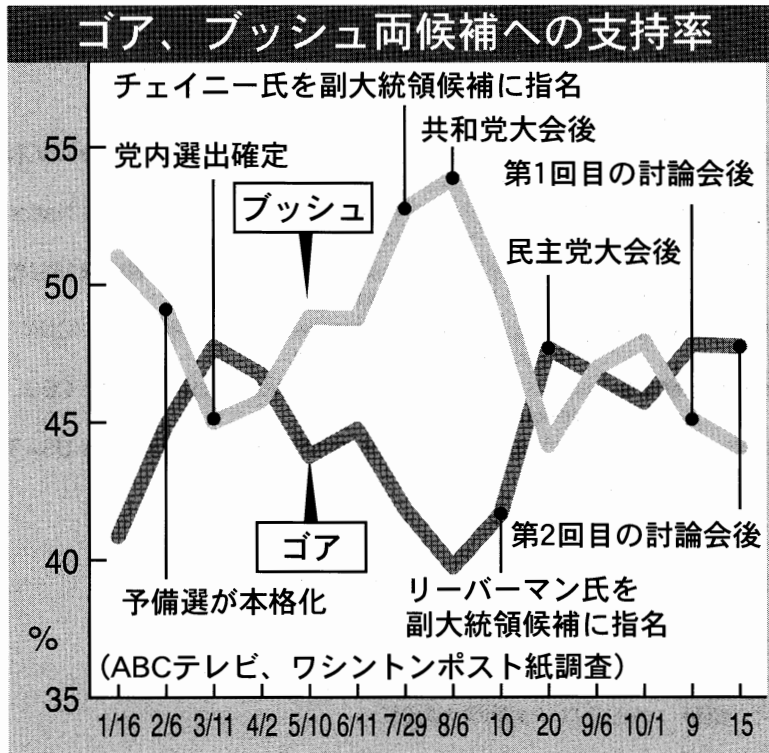
ところが10／5から共和党支持率が上昇、10／4から10／8にかけて支持率が30%から37－39%と大きく伸び、ここで、ブッシュ候補のリードも7－8%と最大になっている。すなわち、ゴアの第1回テレビ討論直後のリード、そしてその後、ブッシュが追いつき、追い越したのは、単に候補者の支持率が変化したというだけでなく、政党支持そのものがこの短期間の内はかなり大きく変動した可能性があるということだ。

もちろんこれは、サンプリングによる誤差や、ギャラップ社のサンプリングの偏りといった失敗によることも考えられる。しかし通常、誤差は1－2%というのが専門家の評価である。またサンプリングの偏りということもないわけではないが、あまり考えにくい。とすると、この短期間に、テレビ討論の印象から、候補者への評価が変化し、さらにそれが、人々の政党支持率の変動までもたらした、と言うことは十分考えられることだ。

一般に、共和党支持者が民主党支持に、また民主党支持者が共和党支持に、「改変」する可能性はたいへん少ない。とするとこの間に、候補者評価が、ゴア・リードから、ブッシュ・リードへという変化を引き起こしただけでなく、政党支持までが、民主党支持から支持無しへ、そして支持無しから共和党支持へという変動を引き起こした、という可能性が考えられる。これだけのデータから結論は得られないが、今後検証すべきたいへん興味深い一つの仮説である。

こうして3回のテレビ討論は、有権者の意思決定に重要な影響を及ぼした。特に、第1回討論とその後のマスコミ論調によって、「フレーミング効果」が起これ、ブッシュ、僅かにリードとなり、そのブッシュ候補の評価の上昇が、共和党支持の増加につながって行ったと思われる。この僅かなブッシュのリード、共和党支持の上昇を、ゴア、民主党は、最後まで縮めることが出来なかった。これが、今回選挙にみられた一つのハイライトであったということがいえよう。＜表18、参照＞。＜[washingtonpost.com](http://washingtonpost.com) 11/1/2000 *Richard Morin and Claudia Deane, What's behind Gallup's Volatile poll numbers?*＞。

<表 18> ブッシュ、ゴア両候補の支持率



<「日本経済新聞」、2000年10月18日、夕刊、より>

## 8、一般投票の経過と開票速報

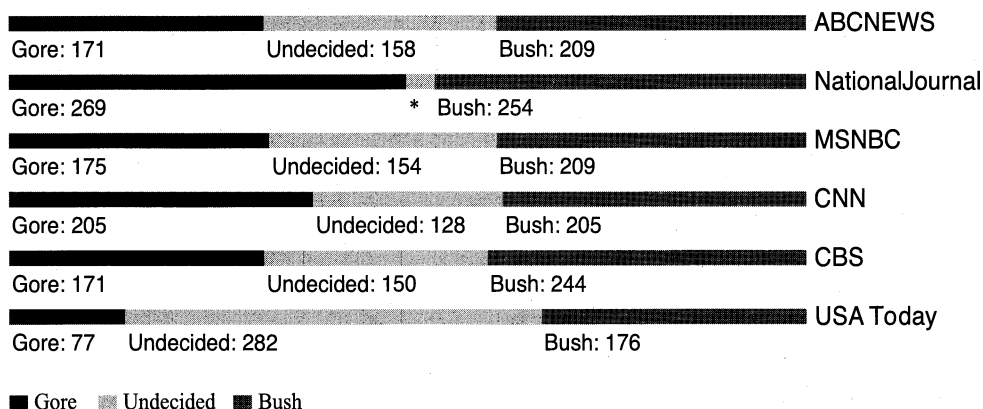
### <選挙予測の各社比較>

大統領に当選するには270名の選挙人を獲得しなければならない。大統領選挙の直前に、キャンペーンアナリスト達が各州の選挙人獲得数について予測を行なっているが、「未定」(Undecided)と判定するものが増えている。各州の選挙人の数は、夫々の州における上院議員と下院議員の数の合計数である。

各社の予測は<表 19>の通りである。ABC、NBC、CBSなどテレビ局系は210対170ほどでブッシュ有利と読んでいる。しかしいずれも未定のものが、150-160もいて、逆転はとも簡単に起こりうることもわかる。CNNの予想は両者大接戦で、205対205と全く伯仲である。ナショナルジャーナルは、未定、15と、ほとんどどちらかに入れて推定しているが、その結果は269対254とこれも大接戦だがややゴア有利という予想だ。USA Todayは過半数がまだ未定という前提であるがブッシュがかなり有利と予想している。いずれにしても投票直前に

おいても、両者が極めて伯仲していることは、これらの予測からも明らかである。  
 <washingtonpost.com 11/1/2000 より>。

<表 19> 各社の選挙予測



\* Undecided: 15

<washingtonpost.com 11/1/2000>

#### <史上最大の接戦 ——フロリダ開票大騒動>

今回の大統領選挙で、わが国の一般国民に一番印象に残ったことは、フロリダ州での開票騒動であったと言えよう。アメリカ大統領選挙に余り関心のない人々も、連日のように報道されるフロリダでのニュースのおかげで、アメリカ選挙についての知識が得られたと言っていた。

いかにこのフロリダでの騒動がアメリカ史上稀に見る珍事であったかは、その後この騒動の経過をニューヨーク・タイムズ、ワシントン・ポストという2大新聞が、ともに特別取材班を結成し、報告書を早くも翌年4月には出版・刊行していることから伺える。<The New York Times, 36 Days, 2001. The Washington Post, DEADLOCK, 2001. 参照>。

さて、フロリダ州での開票騒動の経過について、ごく簡略にまとめると以下のようになる。  
 <asahi.com 2000/12/14、ほか、参照>。

<第1幕> 11月7日、午後7時50分、NBCがVNSの出口調査をもとに「フロリダでゴア勝利」と報道。8時5分には、全局がゴア勝利と報道。早くも日本の民放などでも、ここで、ゴア勝利、という放送がなされている。

<第2幕> 11月7日、午後9時53分、CNNが「ゴアの当確（当選確実）を取り消す」旨を報道。出口調査とのズレがあまりに大きいためとのこと。30分後には、全局が、ゴアの当確

を取り消す。

＜第3幕＞ 11月8日、午前2時16分、フォックス・ニュース・テレビの選挙結果判定班がフロリダ州での開票状況をもとに、「フロリダでブッシュ勝利」、したがって「新大統領にブッシュ氏」と報道。4分以内に、CNNはじめ全局が、「ブッシュ当選」と報道。ゴア氏も電話でブッシュ氏の当選を祝福する。実質上の敗北宣言である。

＜第4幕＞ 11月8日、午前4時、CBSが「ブッシュの当確を撤回」する。4時5分には、4大ネットワークのすべてが、ブッシュの当確を撤回。フロリダ州で5万票以上あった差が、1000票そこそこに縮まった、との情報による。フロリダ州法により、当選者と次点の票差が投票総数の0.5%に満たない場合、自動的に計数機による「再集計（リカウント）」が実施される。そのため、フロリダ州での「再集計」が終了するまで、勝敗はお預け、ということになった。ゴア氏も直ちに電話で敗北宣言を撤回する。

こうして、テレビ開票速報は、2転、3転、結局大統領の確定は、フロリダ州の再集計の結果が確定するまでお預け、ということになる。

この一つの原因に出口調査への過信、誤用があったことは重要だ。と言うのは、今回は、ABC News, CBS News, CNN, Fox News, ABC News, そしてAP通信社が、大連合して結成した、VNS (Voter News Service) というデータバンク (consortium) により本格的出口調査が行なわれた。

このような合同調査が実現したと言うだけでも、画期的なことであつたし、当然、サンプル数や規模など、量的にも十分なものであり、専門家が結集して行なった調査であるという点で、調査の質もしっかりしたものであつた。各社が別々に行なっていた出口調査は、誰に投票したかと、あとは簡単な属性などを聞くもので、同じような調査を各社が行なうのは無駄であり、何とか合同調査ができないものかということは、以前から言われていた。それが今回実現したわけだ。こうして、データは共同で取り、結果の分析・活用は、各社が独自に行なう、という了解で、この合同調査は、今回はじめてスタートした。

趣旨はたいへん結構であつたが、データを活用する各テレビ局の専門家や、分析・活用の体制が十分でなかったと言うことであろう。したがって、A社が、当確を打てば、B社も、それに影響され、一刻も早く当確を打ちたいという期待と相まって、各社が他社の報道に付和雷同する、ということになってしまった。各社、同じデータを持っているだけに、そうってしまったのだ。

さらに重要なことは、今回の選挙は多くの州であまりの大接戦で、調査で予測できる誤差範囲を遥かに超えたものであつた、ということだ。これが最大の不運の原因であろう。特にフロリダ州でのブッシュ、ゴア、両候補の差は、最終的に0.005%というもので、いくら大サン

ブルの調査でも、到底、調査で予測できる範囲を超えたものであった。こうして調査そのものが、今までにない画期的なものであったがゆえに、かえって、それを過信する結果となり、このような誤報とその追隨、という過ちを繰り返すことになったといえよう。

合同調査そのものが悪いわけではなく、調査としては最高の出来栄であったことであろう。しかしすべてのテレビ局が全く同じデータを持って、各局独自の分析・解釈により、そのデータを活用・報道したこと、しかも、史上未曾有の大接戦という、偶然条件が重なった結果、このようなことが起こったと言えよう。それにしても、データの過信は厳に慎まなければならない。テレビ局も誤差の範囲内で、謙虚に活用、報道することが、いかに重要であるかが示された事件と言えよう。

#### <新聞各紙の開票結果報道>

さて、こうして、投票日翌日の新聞報道も、いつもとはかなり異なったものとなった。

まず第1に、当然のことながら、大統領が確定しないので、いつものような一面トップを飾る巨大な見出しによる「大統領誕生」の報道はできない。各紙とも、たいへん慎まじやかな記事となる。投票日翌日の開票結果の報道について、主要各紙の論調を見てみよう。

<「ニューヨークタイムズ」、11/8、朝刊> ニューヨークタイムズでは、さすがに1面のトップではあるが、ヒラリー・クリントンの上院当選の記事と並べた、実に簡単な報道である。

ブッシュとゴア、大接戦、

ヒラリー・クリントン上院議員に当選

そして、小見出しは2つ。

最後まで伯仲。両候補それぞれの政党を確保、しかし支持なし層は真っ二つに。

シーソーゲーム。西海岸は副大統領に、南部は知事に。

この第1の記事では、「ゴアは出口調査の結果、“一般投票”では僅かながら全米で明らかに勝利したが、獲得した“選挙人”での勝敗については、昨夜の間、ゴアとブッシュの間を行ったり来たり、最終的には次の大統領は、一般投票では敗北したにもかかわらず、獲得した選挙人の数の多いものが大統領となる、という可能性が大いにでてきた」、また、「両党の候補は、自分の政党の支持者から圧倒的支持を獲得している。しかし支持なし層、これが多くの選挙の結果を決定することになる人々なのだが、この人達が、真っ二つに割れた」と報じている。

その後、詳細な世論調査による分析が続く。ブッシュが保守的過ぎるというものより、ゴアがリベラル過ぎる、というもののほうが多いことから、ブッシュの「思いやりのある保守主義」(compassionate conservative)というスローガンが、ゴアのアピールより有効だったようだ、などと分析している。

いままでは、ニューヨークタイムズの出口調査が、もっとも信頼できるものとして、われわ

れもこの結果が出るのを待ちかねていたものであるが、今回は、経費節減のためであろう、ニューヨークタイムズも、ウォールストリートジャーナルも、すべてテレビ局連合のデータバンク VNS (Voter News Service) の出口調査を用いて、分析解説を行なっている。なるほど、同じような出口調査を各社が行なうのはムダであり、共同調査を行い、分析だけは各社が独自に行なうという、今回の方式は、たしかに合理的ではある。しかしなんとなく寂しいことも確かである。テレビ局だけでなく、新聞社までが、テレビ局の合同調査をそのまま使うというのは、どんなものか。

各社が同じような調査を行なうのは無駄なように思われ、筆者も共同調査を薦めてきたが、各社がそれぞれ、知恵を絞り、同じことを聞いていても微妙に違う聞き方をしていたり、また全くユニークな視点が提起されていたりして、これらを総合することによって、事実が立体的に見えてくることもしばしばであった。この点については、最後にまた検討したい。

第2の記事は、開票結果の分析である。ブッシュはほとんどの南部の州を制し、ゴアは東西両海岸の大票田(カリフォルニア州とニューヨーク州のこと)を制し、そしていつもなら勝敗を決する中西部で全くの伯仲となり、こうして全国レベルの大接戦となった。開票データの詳細な分析が行なわれている。

<「ウォール・ストリート・ジャーナル」、11/8、朝刊> ウォール・ストリート・ジャーナルは、さらに小さな取り扱いで、1面トップは、小見出しのみ、という状況だ。

ブッシュとゴア、大統領選挙戦を最後まで大接戦(?)

決心のつかない有権者が民主党に流れる；フロリダで決戦

アル・ゴア副大統領とジョージ・W・ブッシュは、ホワイトハウスへの大激戦(neck-and-neck race)のため、今朝現在、勝敗についての結果は封印されたままだ(locked)。

投票日も終わったが、アイオワ州、オレゴン州のような激戦州ではここ20年での最大の接近で、まだ結果が出ない状況だ。出口調査の結果ではゴアが一般投票ではわずかにリードしているが、しかしどちらもホワイトハウスに入るのに必要な議席を確保できないでいる。

出口調査によれば、ゴアが一般投票ではわずかにリードしているが、ホワイトハウスに入るのに必要な270の選挙人は、どちらの候補もまだ獲得できていない、と報じている。

また、この夜、両陣営本部は息を呑むような逆転劇が続いた。まづ共和党に有利な州、フロリダで、民主党が勝利とテレビ局が報道した時には、ゴア陣営は小躍りした。しかしその直後、他のテレビ局がフロリダはあまりの接戦で勝敗不明と報道した時、今度はブッシュ陣営が喝采したと、昨夜のテレビ報道を紹介している。

<「USA TODAY」、11/8、朝刊> USA TODAYも大方同じような報道だ。

ブッシュ、ゴア、がけつぶち

フロリダが鍵を握る

ジョージ・W・ブッシュは、今日、大統領への勝利という期待の入り口に立っているのだが、フロリダでのかみそり1枚の差での勝利が、彼を勝利の座につけることに待ったをかけている、と報道している。

また、昨夜のテレビ報道で、ブッシュ勝利、ゴア勝利と、2転3転した点についても、コメントしている。

<「ボストン・グローブ」、11/8、朝刊> ここでは異例の大活字で再集計が一面トップだ。

#### 再集計！

フロリダでの開票が混乱を引き起こす；ゴアはブッシュに敗北宣言、撤回

「ここ数十年での最大の接戦であるアル・ゴアとジョージ・W・ブッシュとの戦いは、決定的な役割を果たすフロリダで、ついに数百票の差にまで縮まり、今朝になっても勝敗の行方はわからない。このフロリダで再集計となることになっているのだが。

夜明け前、テレビ報道で、テキサス州知事、ブッシュ、大統領に当選、というのを聞いて、ゴアは今朝、早々と、ブッシュに当選を祝福する電話（敗北宣言に相当）をかけた。しかしブッシュのフロリダ州でのリードが、極限まで縮まるにつけ、ゴアは再びブッシュに電話をかけ、先ほどの敗北宣言を取り消した。こんなことはアメリカ政治で初めてのことだ。

フロリダ州での投票結果があまりに接近しているので、フロリダで9万票以上獲得すると考えられている緑の党のラルフ・ネーダーの得票が大きな影響をもつことは明らかだ。ネーダーはまた、まだ結果が出ていないウイスコンシン州、オレゴン州でも、大きな影響を及ぼすことになる」と報じている。

<「ボストン・グローブ」の選挙特集> では大票田での結果が勝敗を決すると報じている。

#### 重要諸州での戦線熾烈

「激戦の重要な州で、アル・ゴアは、労働組合、労働者階級、そして投票直前に意思決定をした人々から、支持された。ジョージ・ブッシュは、男性、金持ち(well-heeled)、そして正直とリーダーシップがより良い大統領の条件だと考えた人々から支持された。ここ数ヶ月、この二人の大統領候補は、ペンシルバニア、ミシガン、フロリダ、ウイスコンシンといった選挙人の多い大票田の諸州で勝利を収めるべく、広告を打ち、またセールスマンのように足しげく通い、激しく戦ってきた。しかしその結果は、投票日の翌朝が開けても、まだ明らかでない。ブッシュはフロリダ州で、わずかなリードを保っている。この州で勝てば、ブッシュは大統領に必要な選挙人を確保できるのだが。ゴアは、ミシガン、ペンシルバニア、イリノイ、ウイスコンシンの各州で勝利を収めたが、あまりの接戦で、勝敗はいまだ不明である」と報じている。

<「ニューヨークタイムズ」、11/9、朝刊> 投票日の翌日の朝刊では、こうして開票結果はまだ確定しない州が多く最終確定はできなかったのも、一応の開票結果が出たのは、翌々日、11月9日の朝刊であった。この日の一面トップの見出しと記事は、以下のとおりであった。



ブッシュフロリダでわずかにリード

再集計（リカウント）が選挙の鍵を握る

本日での開票（開票率99%）での開票結果は、以下のとおり。

アル・ゴア	48,707,413	獲得選挙人	255 <sup>*1</sup>
ジョージ・W・ブッシュ	48,609,640	獲得選挙人	246 <sup>*1</sup>
差	97,773 (0.1%)	未 定	37 <sup>*2</sup>

\*1：当選必要選挙人 270

\*2：現在未定は、フロリダ州、ニューメキシコ州、オレゴン州

一般投票では、ゴア副大統領が98000票の差（0.1%）で、きわどい勝利。しかし、選挙人の数は、ゴア、255人、ブッシュ、246人で、いずれも当選に必要な270人を確保できず、勝敗はフロリダ州（選挙人、25人）での再集計（リカウント）の結果を待って、決定することになった旨、報道された。

以上が、主要新聞各紙の、開票報道の概況であった。

## 9、フロリダ法廷合戦

さてこうして、焦点はフロリダ州での「再集計」の問題に移る。

まず、ブッシュ、ゴア、両候補の獲得票数の差が、0.5%以下であることは明らかなので、フロリダ州法に基づいて「再集計」を行なうことは当然であるが、州法にはこの再集計の具体的方法については何も規定されていない。しかも再集計の仕方によって結果は逆転する可能性がある。こうして、再集計の仕方をめぐって両陣営は法廷闘争を通じて凌ぎを削ることになる。フロリダでの法廷闘争の経過を、＜asahi.com 2000/12/14＞の要約をもとに、まとめてみよう。

- 1) フロリダでの法廷合戦は、ゴア陣営のフロリダでの開票の全面的やり直し請求から始まる。ゴア陣営は、この再集計を、機械集計だけでなく、手集計で行なうことを要求したのである。まず、ゴア陣営は、州法に基づき、パームビーチ郡など4郡で「手作業による再集計」を求めた。手作業なら、機械で読みとれなかった疑問票も判読できる。民主党の強い地区なので、疑問票の中にゴア票が多いとの読みだった。
- 2) ブッシュ陣営は、早速、この手集計を禁止するために、連邦地裁に、再集計「差し止め請求訴訟」を起こす。しかし13日、連邦地裁はこの請求を棄却、再集計は続けられる。
- 3) しかし同じくフロリダ州法に「投票日から7日後に開票結果を確定しなければならない」とある。そこで、共和党でブッシュ陣営の選挙運動で活躍したフロリダ州州務長官、キャサリン・ハリスは11月13日、「規定通り明日の午後5時に選挙結果を確認する」と発表。

11月14日の確定日を前に、機械の再集計はほぼ終わっていた。一部の郡では、公務員や多数のボランティアがまだ手集計を続けている。全米が目にする14日夜、ハリスが、機械による再集計の票を確定票として読み上げる。ブッシュ、「291万492票」、ゴア、「291万192票」。即日開票の時の1784票差より、その差はなんと300票に縮まっている。約600万票の投票総数の僅か0.005%の差で辛うじてブッシュ、リード、という結果だ。

- 4) 米国では州の決定に郡が必ず従うという関係にはない。パームビーチ郡は14日、手集計作業の続行を決定する。予想通りハリス長官は15日夜、手集計の追加票は受理しない、と発表する。
- 5) ゴア陣営は、翌日、手集計を認めるよう巡回区裁判所に提訴するが、17日、ハリス長官の決定を支持して、提訴は却下される。こうして18日の不在者投票の結果を待って最終確定ということになり、ブッシュ氏勝利は目前となる。
- 6) ゴア陣営は州最高裁に上告し、ここの上訴審にゴアは望みを託す。州最高裁は判事7人のうち6人までが民主党員だ。予想通り17日、州最高裁は、ハリス長官が18日に勝者を確定することへの「停止命令」を出す。判決までの緊急避難措置である。そして翌18日には、手作業による再集計結果を確定結果に算入しなければならない、との判決を下した。集計の期限も26日夕まで延長する。全米はこの判決に仰天する。だがゴア陣営の喜びも束の間、半日後、マイアミ・デード郡が「26日までに終えることはできない」との理由で、手集計をやめてしまう。
- 7) しかし、11月18日、ハリス長官は州法に定める通り不在者投票の開票結果までを含めて「537票差で、ブッシュ・テキサス州知事の勝利」とテレビで最終宣言。ブッシュ氏もすかさず勝利宣言をする。
- 8) ゴア氏は再び、手集計を求めて、州最高裁に上訴。ブッシュ氏の「勝利宣言」から一夜明けた27日、ゴア氏は巡回区裁に、確定票に対する異議を申し立てた。手集計を打ち切ったマイアミ・デード郡、時間切れで再集計の苦労が水の泡と化したパームビーチ郡などの票をかき集めれば逆転する。ゴア氏はそう信じて疑わなかった。そして、12月8日、州最高裁は「手作業の再集計を、全郡で、即刻始めよ」との、全米を驚かす判決となる。全郡で再集計ということになればゴア氏逆転の可能性は高い。
- 9) 今度はブッシュ陣営が連邦最高裁に上訴した。連邦最高裁はフロリダ州最高裁の判決を破棄、差し戻し、との判決。12月4日、昼前、テレビ局の速報は「連邦最高裁がフロリダ州最高裁の判決を破棄」。CBSの著名アンカーマン、ラザーは「ブッシュの勝利」と報道。法定期限を越えた手作業集計を認め、投票結果に算入するように命じたのが、21日の州最高裁の判決。それを破棄するなら、ブッシュ氏の大勝利だ。しかし法律専門家たちが間もなく、コメントを発表。「州最高裁判決がひっくり返ったのではない。連邦最高裁は疑問点

を明確にしてほしい、と差し戻しただけだ」、とのこと。

10) ゴア、連邦最高裁に上訴。攻防は、再び、州最高裁に持ち込まれた。

11) ところが、12月8日、フロリダ州最高裁が、連邦最高裁の判決を無視して、「手作業の再集計を、全郡で、即刻始めよ」と発表。全米をぼう然とさせる決定が下された。マイアミ・デード郡で途中まで数えた票なども確定票に入れるという判断まで下し、ブッシュのリードは193票に縮まった。全郡で数えるとなれば民主党の強いところばかりではなくなるが、ゴア、逆転の可能性は高い。

12) ブッシュ陣営は、必死の、連邦最高裁への上訴。州最高裁に差し戻したのだから、連邦最高裁は、今度は介入しないだろうとの見方が強かった。しかし翌日、連邦最高裁が「手作業を停止せよ」との命令を下した。再び、全米を揺るがす異例の判断だった。9人の判事のうち、5対4の僅差での判断に「司法の最高権威までもが、判事個人の党派色で動くのか」との失望が広がった。

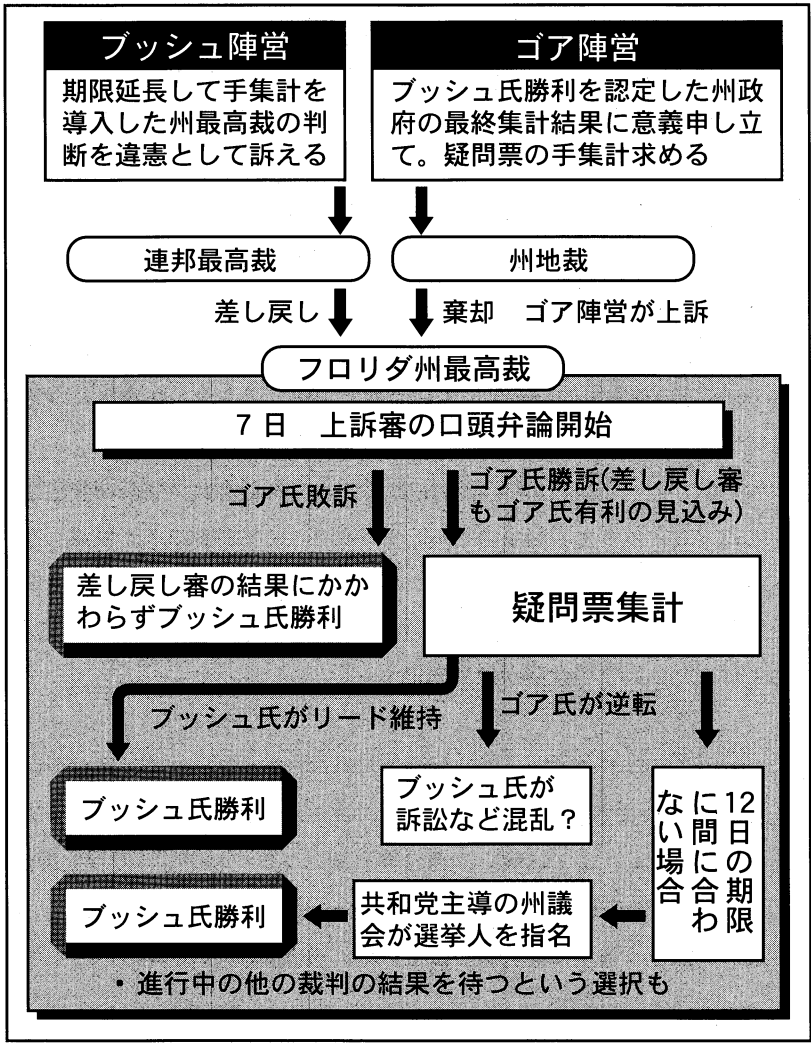
13) そしてついに、12月12日、連邦最高裁は、「フロリダ最高裁の判断は憲法違反」とする決定を示した。判決は9人の判事のうち、保守派3人と中道派2人が賛成、リベラル派4人が反対の5対4という、きわどい判定であった。しかし、事実上この判決により、これ以上、手集計によって合法的な基準による再集計が期限内にできる、という見通しはない、ということになり、ゴアの敗訴がほぼ確定する。

こうして、世論もこれ以上の混乱は避けるべきとの声が高まる。ゴア候補もついに、テレビを通して、「最高裁の判決は認めないが、アメリカの統一と民主主義のため撤退する」などと述べ、選挙戦での敗北を認め、ここに漸く、36日間に及ぶフロリダ州での開票結果が確定する。

第43代アメリカ大統領の誕生である。＜asahi.com 2000/12/14より＞。

以上の経過を、わかりやすく一覧表にしたものが、＜表20＞である。

<表 20> フロリダ法廷闘争の要約



<「日本経済新聞」、2000年12月8日、朝刊、より>

<一般投票の結果>

こうして、投票終了後、36日ぶりに、ようやく投票結果が確定する。

2000年12月21日現在での、確定投票結果は、以下の通りである。<表 21>。

&lt;表 21&gt; 大統領選挙結果

Candidates	** Elctoral Votes	Popular Votes	%
* George W. Bush (共和党)	271	50,456,169	48
Al Gore (民主党)	267	50,996,116	48
George W. Bush (緑の党)	0	2,831,066	3
Pat Buchanan (Ref.)	0	447,798	0

<washingtonpost.com> \* 勝者 (2000/12/21、現在)      \*\* 選挙人数：538人

<選挙人数> ジョージ・W・ブッシュ：271人、アル・ゴア：267人、その差4票で、ブッシュの勝利。ジョージ・W・ブッシュ、第43代大統領に当選、が確定する。

<一般投票結果> ただし、一般投票で、両者が獲得した票数は、ブッシュ：50,456,169票、ゴア、50,996,116票と、ゴアが54万票も多く獲得している。もちろん、全米での有権者総数約1億400万から見れば0.005%の微差ではあるが、しかしゴアが多数の国民の支持を得たことは間違いない事実である。

<獲得した州の数> 両候補が獲得した州の数は、ブッシュ：31州、ゴア：21州である。ブッシュが南部、中西部のほとんどの州と東部の半分近くを制覇したのに対して、ゴアは、西部と、東部の大票田、特にカリフォルニア州とニューヨーク州を獲得したため、これほどの大接戦となったことがわかる。<付表4、参照>。

## 10、戦い済んで日が暮れて

### ——2000年大統領選挙にみる「社会的亀裂」

今回選挙で特徴的な事実、共和党、民主党、ともに、両党の本来の支持層を取り戻しているようだ、という点だ。イデオロギー的にみても、また、性、年齢、学歴などのデモグラフィック要因からみても、両党の古典的支持層がこここのところ離脱しつつあったのが、ここ四半世紀での基本的動向であった<鮑戸、1980、参照>が、それが後述のごとく、今回、戻って来たということが言うそう。そしてそれが史上稀に見る大激戦の最大の原因と考えられる。

こうした視点から、まづ両党候補の支持層について、イデオロギー的にどんな別れ方をしてるか(イデオロギー的・文化的亀裂 ideological cleavages)、また支持者の属性からみて、両

候補が夫々、どんな階層、どんな地域で、支持を得ているかなど(社会的亀裂 social cleavages)について、VNS (Voter News Service) が投票日当日に行なった出口調査の結果から、少し詳しく見てみよう。＜「Wall Street Journal」、2000年11月9日、朝刊＞。

#### ＜政党支持と保革イデオロギー＞

まず、「イデオロギー的亀裂 (ideological cleavages)」について。

＜表22＞は、政党支持と投票との関連を見たものである。共和党の9割がブッシュに、民主党の9割がゴアに、投票している。そして支持政党なしの人々はブッシュ、ゴアがちょうど半々である。両党とも、非常に高い支持率を確保していることにまず注目されたい。

次いで、保守—リベラルというイデオロギーレベルを見てみると、ここでも保守の8割がブッシュに、リベラルの8割がゴアへと、保革の両陣営とも(政党支持より少し少なくなるが)、やはりかなり高い支持率を確保していることがわかる。

前回選挙で誰に投票したかについても、一貫している。民主党に投票したものの8割がゴアに、共和党に投票したものの9割がブッシュに、投票している。

さらに、前回、ペローに投票したものが、2:1でブッシュに投票している、と言う点は注目される。前回ペローに投票したいわば“2大政党への不満層”が、現政権である与党民主党を拒否して共和党に流れた、ということがわかる。

＜表22＞ イデオロギー

		BUSH	GORE	NADER
PARTY ID	DEMOCRAT	11%	86%	2%
	REPUBLICAN	91	8	1
	IND/OTHER	47	45	6
VOTE BY IDEOLOGY	LIBERAL	13	80	6
	MODERATE	44	52	2
	CONSERV	81	17	1
ROW VOTED IN 1996	CLINTON	15	82	2
	DOLE	91	7	1
	PEROT	63	27	7
	OTHER	52	26	15
	DID NOT VOTE	52	44	3

＜「Wall Street Journal」、2000年11月9日、朝刊＞

イデオロギーの側面から見て、本来の保守的な共和党支持層が、共和党に投票し、本来のリベラルな民主党支持層が、民主党に投票している。すなわち、両党が、自分達の本来の支持層をしっかりと確保することが出来た。これが今回の大激戦の、最大の理由と言えよう。

#### <デモグラフィック属性>

「社会的亀裂、(sociological cleavages)」について。

性、年齢、学歴、職業などのデモグラフィック要因と投票との関連をみたものが<表23>である。

<表 23> デモグラフィック属性

		BUSH	GORE	NADER
VOTE BY GENDER	MALE	53	42	3
	FEMALE	43	54	2
VOTE BY RACE	WHITE	54	42	3
	BLACK	8	90	1
	HISP	35	62	2
	ASIAN	41	55	3
	OTHER	39	55	4
UNION MEMBER	YES	37	59	3
	NO	52	44	2

<「Wall Street Journal」、2000年11月9日、朝刊>

まず性別で、若干の差が見られる。すなわち、ブッシュは男性に、ゴアは女性に、それぞれ10%ほど高い得票を示している。

次いで人種では明らかにブッシュが白人から、そしてゴアが黒人(9割を獲得している)、ヒスパニック、アジア系など、マイノリティーから支持を得ていたことがわかる。

また、労働組合のメンバーはゴアを、そうでないものはブッシュを支持している。こうして古典的な民主党、共和党の支持層が、ゴア、ブッシュを支持したことがわかる。

その他、年齢別、学歴、などでは、はっきりした傾向差は見られなかった。

#### <階級・階層>

階級・階層についてもかなり明確な亀裂が見られる。すなわち、ゴアは年収3万ドル以下の層で5割から6割の支持を得ているのに、ブッシュは5万ドル以上、7万5千ドル以上、10万

ドル以上で、それぞれ、51%、52%、54%の支持を得ている。また株を持っているもののなかでは、ブッシュ支持が多く、持っていないものでは、ゴア支持が多い。大差ではないが一貫した傾向差が見られる。

もう一つ重要なことは、“4年前と比べて暮らし向きは良くなったか”という質問で、良くなったと答えているものは、現政権である民主党のゴア候補を、そして4年前と比べて悪くなったというもの、及び同じだ、と答えたものは、現政権でない共和党のブッシュ候補に投票している。これも近年注目されている「経済政策評価による政権交代説」（経済運営がうまく行っていると考えたものは現政権を支持し、そうでないものは現政権を追放しようとする）を支持する結果となっている。＜鮑戸、1986、参照＞。

＜表 24＞ 階級・階層

		BUSH	GORE	NADER
VOTE BY INCOME	LESS \$15,000	37	57	4
	\$15 - 30,000	41	54	3
	\$30 - 50,000	47	49	2
	\$50 - 75,000	51	46	2
	\$75 - 100,000	52	45	2
	OVER \$100,000	54	43	2
FAMILY'S FINANCES VS 4 YEARS AGO	BETTER	36	61	2
	WORSE	63	33	4
	SAME	61	35	3
OWN STOCKS?	YES	51	47	2
	NO	45	52	3
VOTE BY CLASS	UPPER	39	58	3
	UPPER-MIDDLE	53	43	3
	MIDDLE	49	48	2
	WORKING	46	51	3

＜「Wall Street Journal」、2000年11月9日、朝刊＞

#### ＜宗 教＞

宗教でも、今回は明確な亀裂を見せている。伝統的共和党の支持層であるプロテスタントは56%がブッシュを、そしてマイノリティーの宗教であるユダヤ教では8割、その他の宗教では6割強がゴアを支持している。

また毎週1回またはそれ以上教会に行くという熱心なクリスチャンは6割がブッシュを、そ



うでないものはゴアを支持するという結果だ。

<表 25> 宗教

		BUSH	GORE	NADER
VOTE BY RELIGION	PROTESTANT	56	42	2
	CATHOLIC	47	50	2
	JEWISH	19	79	1
	OTHER	28	62	7
	NONE	30	61	—
ATTEND RELIGIOUS SERVICES	MORE WEEKLY	63	36	1
	WEEKLY	57	40	2
	MONTHLY	46	51	2
	SELDOM	42	54	3
	NEVER	32	61	6

<「Wall Street Journal」、2000年11月9日、朝刊>

#### <地 域>

最後に、地域との関連をみたものが<表 26>である。まず都市－農村（rural-urban）では、ホワイトカラー、ブルーカラーの多い都市部では、民主党のゴアが、郡部の保守的地帯では、共和党のブッシュが、それぞれ6割の支持を得ており、中間の郊外地域で両者伯仲、という結果だ。

<表 26> 地域

		BUSH	GORE	NADER
WHERE DO YOU LIVE?	CITY	36	61	2
	SUBURB	49	47	3
	RURAL	59	38	2
VOTE BY REGION	EAST	39	56	3
	MIDWEST	49	48	2
	SOUTH	55	43	1
	WEST	46	48	4

<「Wall Street Journal」、2000年11月9日、朝刊>

地域では東部でゴアが6割を獲得している。大票田、ニューヨーク州で善戦したためであろう。2人の地元南部では、ゴアはあまり人気がなく、ブッシュが55%を獲得している。そのほかはあまりはっきりした傾向差は見られない。伝統的には共和党の地盤である西部で五分五分の結果となっているのも、ゴアがカリフォルニア州という大票田で善戦したためであろう。

以上、共和党は、白人、高所得層、プロテスタント、地方（rural）で、しっかりと得票しており、民主党も、少数民族（minorities）、低所得層、都市（urban）、労働組合員、そして、カソリック、ユダヤ教などの、少数民族の宗教の人々をしっかりと確保している。

## 11、2000 年大統領選挙の勝因と敗因についての総合的考察

以上の事実を踏まえて、今回選挙の勝因と敗因について、序盤戦から、党大会、そして秋の終盤戦、更にはフロリダ州での裁判闘争と、選挙戦の全経過を振り返りながら、今回選挙での両者の勝因、敗因について、まとめてみたい。データによって必ずしも確認できないものもあるが、筆者の1年間の取材を通しての、やや主観的な印象・評価も含めて、最後にまとめてみることにしたい。

### <両候補大接戦の原因>

はじめに両候補にとってともにプラスとなった、いくつかの要因について、考えてみよう。いわば、ブッシュ、ゴア、両候補にとってプラスとなった要因だ。次いで、ブッシュ候補の勝因、そして、ゴア候補の勝因について、順次検討していく。

#### 1) 社会的亀裂の復活と対立

今回選挙の一つの特徴は、共和党、民主党の、従来の古典的支持層が戻ってきたと言う点だ。1970年代より政党の「再編成」(party realignment)、「脱編成」(party dealignment)という現象が進行していることが、しばしば論じられてきた<sup>4</sup>。特に当時少数野党であった共和党が、連続して大統領の座を獲得するに及んで、両政党の支持層が大きく変化しつつあること、そして政党支持の意味も、徐々に変わりつつあることなどが指摘された。すなわち、連邦議会は民主党に、そして大統領は共和党に、といったような役割分担がすすんで行くことであろう、ということが、盛んに議論された。＜鮑戸弘、1989、他、参照＞。

その後政党支持が大きく変化して行く。1970年代まで大雑把に言って、民主党、45－50%、共和党、25－35%、支持なし、15－25%、といった状況が続いていたが＜鮑戸、1980、他、参照＞、最近では民主党と共和党の支持率は大接近してきた。民主党支持が減衰し、その分共和党支持が増えていった。したがって支持層も徐々に変化していった。特に民主党支持層の減少は、主要な支持層であった、都市居住のブルーカラー、黒人、ヒスパニック、黄色人種などの少数人種の支持が減少していったということが言われた。脱編

成が起きているということである。それに伴って、今後ますます、両政党の支持層が根底から変化し、政党支持率の逆転もありうるのではないかと予測された。再編成の動きもみられるということだ。社会的亀裂とその対立が、徐々に弱まっていったのである。

しかし今回の選挙で明らかなことは、本来の共和党支持層、本来の民主党支持層が、戻ってきた、と言ってよいのではなかろうか。共和党の9割をブッシュが、そして民主党の9割をゴアが、それぞれ確保し、またイデオロギーに関しても、保守、リベラルの、それぞれ8-9割を、共和党と民主党の両党候補が確保したということは、たいへんなことである。1年間を通じて両陣営の熾烈な戦いが報道されるなかで、人々は本来の自分の支援する政党について再考し、改めて自分の政治的立場、そして支持を、確認したのではなかろうか。これはどちらの勝因ということではなく、両候補にとって有利に働いた、第1の要因であったといえよう。

## 2) 第3党の役割とその効果

今回選挙でも、第三党、緑の党、ラルフ・ネーダーは、全体としてはたった3%の支持しか得られなかった。しかしこの第3党の候補が立候補したために、両候補の票は微妙に割れる。そしてそれが、両党に危機感を与え、両党の活動が刺激され、より一層熱心にキャンペーンにかかわったことは明らかだ。

しかも今回のような大接戦の時には、甚大な影響をもったことが推察される。前回の大統領選挙で、ペローに投票した人の7%が、また前回、3大候補以外に投票したもののものでは15%が、今回、ネーダーに投票している。今回の選挙の結果を決定したフロリダ州での選挙のような大激戦のとき、この7%、15%という数字は、決して無視できないものであり、これがまさに、勝敗を決する可能性もある。前述の、ボストン・グローブ紙の指摘の通り、今後の重要な分析課題であろう。

## 3) 副大統領の役割

今回の選挙で大きな役割を果たしたのは、副大統領の指名であった。共和党も民主党も、ともに大統領候補になってもおかしくない大物が、指名されている。ブッシュ候補は、テレビ討論でも示されたように、若さと、新鮮さと、誠実さで、評価されているが、大統領としての資質という点では不安がもたれていたことは、世論調査の結果からも、明らかだ。その点、共和党の重鎮、リチャード・チェイニー、元国防長官が、大いに信頼感を添えて、ブッシュ候補を助けたことは明らかだ。

また民主党においても、最大の課題は、個人的には人気があるものの、“不適切な関係”によって国民の信頼を失った、クリントン大統領との関係を、如何に断ち切るか、ということであった。同じ民主党にしながら、クリントン大統領の不適切な関係を正面きって告発したジョセフ・I・リーバーマン上院議員を、副大統領候補に指名することによって、ゴア

がクリントンとは一線を画するものであることを明示することが出来た。いくつかの世論調査の結果も、この副大統領候補指名の前後に、ゴアに人気が挽回している。

こうして夫々、副大統領が、両候補の欠点を補うための大きな役割を果たしたことがわかる。

今回選挙が大接戦となった、もう一つの原因に、両党での、この副大統領候補指名の成功を挙げることが出来よう。

## <ブッシュ候補の勝因>

### 1) 早い出馬と資金集め

何と言ってもブッシュ候補は早々と出馬を宣言、父親のブッシュ元大統領の威光を借りて早々と資金集めに成功し、フロントランナーとの印象を獲得する。このことによって、共和党の大家候補が、1999年末から2000年初頭にかけて、続々と撤退していった。これが何と言っても大きな勝因といえよう。

### 2) 争点：「思いやりの保守主義」

ブッシュ候補が、マイノリティーや、所得のあまり高くない層からも、4割近い支持を得ることが出来たのは、やはり今回、ブッシュ陣営が、「思いやりの保守主義」という、共和党は、弱いもの、恵まれないもののために働く政党である、というキャンペーンを展開することによって、本来なら民主党の支持層であるはずの階層に、先制攻撃をかけていったことが、成功の一因となっていることであろう。共和党全国党大会でもこの点は大きな賛同を得た。民主党党大会で、共和党の思いやりの保守主義はまやかしてあり、本当の弱いもの、恵まれないものの味方は民主党なのだとうたったが、時すでに遅しの感があった。

### 3) 争点、「減税」

ブッシュ政策の最大の目玉は、大幅減税である。このところ奇跡的に大きく残った財政黒字を、国民に還元して、大幅減税を行なうというものだ。これはレーガン以来、小さな政府、自助努力、大幅減税、といった流れに乗った、共和党の政策で、これが広く国民に受け入れられたことは間違いない。思いやりの保守主義とも相まって、弱い人達に減税を、と訴える。

### 4) 「クリントンの不適切な関係」を猛攻

今回の両党の全国党大会における一つの特徴は、両大会、ともに、相手の候補を攻撃する、ネガティブキャンペーンが、ほとんどない、例年に比べてたいへんフェアな大会であったことだ。しかし共和党大会で、唯一、取り上げられたキャンペーンは「クリントンによって傷つけられた大統領の威信を回復すること」という争点であった。これは4日間の大会

を通じて一貫してその底に流れた主張であった。これがゴアに対して、ボディブローのように効いていった。共和党大会直後のブッシュの驚異の人気上昇は、この戦略の成功を物語っている。

#### 5) 争点、「能力より人柄」

テレビ討論のところで触れた、マスメディア報道の「フレーミング効果」も、一つの勝因となっていたことであろう。すなわちメディアが、ゴアは大統領としての資質においては優れているが、ブッシュは誠実、謙虚な人柄であり、大統領にとって必要なのはどちらか、という問題提起をした、といえよう。そしてそれがきっかけとなって、テレビ討論直後でゴアが圧勝していたのに、数日のうちにこのゴアの優勢が消滅している、という点は重要だ。やはりこの時点でのメディア報道が、ブッシュに有利なひとつの要因となっている。

#### 6) 連邦最高裁判所対策

今回選挙の一つの山場は、一般投票が終わった後に訪れたフロリダ州での開票結果の確定という作業であった。ここでは、フロリダ州最高裁がリベラル寄り、連邦最高裁が保守寄り、という状況で、危うく、フロリダ州最高裁によってブッシュ敗訴か、というところで、最後に連邦最高裁の支持を取り付け、粘り勝ちとなった。これがなければ、ブッシュが敗戦の憂き目を見た可能性は大いにあった。これが、最後の最後の勝因、といえよう。

### <ゴア候補の促進要因>

#### 1) 早い出馬と資金集め

ゴア候補も、民主党の中では、副大統領という圧倒的に有利な地位を利用して、早々と立候補を宣言、資金集めに成功した。メディアは当然、フロントランナーと報道し、有利な立場を固めていった。共和党のように、大物候補が立候補、撤退する以前に、今回の民主党では、立候補すら断念してしまった感がある。

#### 2) 争点、「減税」

思いやりの保守主義と、大幅減税によって、民主党本来の、弱いものの味方、恵まれないものの味方、という争点を、共和党に奪われてしまった形になった民主党が、もう一度盛り返したのが、減税政策であった。ブッシュは、財政黒字を減税にまわすというが、ブッシュの減税は金持ちに厚く貧しいものに薄い。しかしわれら民主党の減税は、貧しいものに厚く、金持ちに薄い、と訴える。これが中所得以下の層に、受け入れられた。

#### 3) クリントン離れ

民主党全国党大会のところで触れたが、今回のキャンペーンの最大のポイントは、ゴアは、クリントン大統領の副大統領でありながら、しかしクリントンの不適切な関係とは一

線を描くものである、ということを、全国民に納得してもらうことであった。

従って、前述の通り、まずリーバーマン副大統領の指名により、そしてまた、党大会の日程においても、現職の大統領であるクリントンを全く無視するわけにはいかないので、党大会初日のみを「クリントン・デイ」として当て、あとは完全にクリントンを無視し、党大会から消し去った。これが成功したといえよう。党大会直後、ゴアの人気は急速に回復しているのも、この点を物語っているといえよう。

#### 4) フロリダ州最高裁判所対策

前述の通り、フロリダ州での開票結果が、全米での結果を決定するという局面で、フロリダ州の最高裁判所がリベラル、民主党寄りであったことは、幸運であった。最後は、連邦最高裁の保守より判決によって、結果としては敗北したが、開票の方法について、次々と民主党に有利な提案を出して戦い、また時には、フロリダ州最高裁の想像を絶するリベラル寄りの判決によって、ゴアはなんども危機を乗り越えた。ここでのゴア陣営の善戦は、高く評価されよう。

## 12、大統領選挙、選挙報道、そして世論の問題点

こうして今回のアメリカ大統領選挙は、その制度の長所と同時に、数々の欠陥をも示すことになった。一般国民の世論にもしばしば現れた、制度上の不満、問題点について、以上の経過を踏まえてまとめておこう。

### 1) 余りに長い選挙キャンペーン期間

アメリカ大統領選挙の最大の特徴はそのキャンペーン期間の長さである。上述のごとく1月のアイオワ州、ニューハンプシャー州両州の予備選挙から一般投票が終了するまで、実に10ヶ月もかかる。実際には前年の9月には11人が立候補を表明していることから考えると、キャンペーンはすでにこの頃から始まっているのである。とすると実質18ヶ月にも及ぶキャンペーンを戦って漸く決着がつくことになる。これは何と言っても長丁場である。事実今回の予備選挙は、3月のスーパーチューズデーで、ほぼ決着がついてしまった。ということは、予備選挙期間は1月から6月まで取ってあるが、実は3ヶ月でも可能、ということを示唆している。

かつてのように、大統領候補が全国を汽車で巡回して、各地の様々な集団、階層のリーダーや、地域のボスと交渉しながら、大統領候補の推薦を勝ち得ていった時代には、少なくとも6ヶ月は必要不可欠であったに違いない。しかし航空機が普及し、マスメディアが驚異的な発展を遂げた今の時代にあっては、予備選挙の期間を短縮することは十分可能であり、次項の選挙費用との関連でも、期間短縮を検討することは必要であるように思われる。

## 2) 莫大な選挙費用

前年9月に11人が大統領候補として名乗りをあげながら、3月には共和党、民主党ともに1名の候補者に絞られていった最大の理由は、各候補の資金難の問題である。他の優秀な魅力的な候補者が、選挙資金が続かず、資金に見通しが立たず、選挙戦から脱落していった。

ボランティアの項で触れたように、マスメディアで「トップランナー」と報道された候補者に資金もボランティアも集まり、2番手、3番手と報道されると、資金もボランティアも集まらなくなる、ということは、多くの選挙事務所の担当者から聞いたところである。こうしてメディアでトップランナーと報道された候補者に、献金が集集中し、その他の候補の資金集めが難しくなる、という面があろう。選挙資金法の抜け穴のため、大企業や各種団体の大規模献金で、こうした“有望候補”に大量に流れる、ということが、その根底にあろう。

反面、フェアな広告合戦を戦い抜くためには、膨大なテレビ広告費がどうしても必要になる、ということも確かである。適切な選挙戦略を立て、選挙戦を戦って行くためには、各候補が独自の立場で世論調査を行ない、強力なブレーンを集めることは、不可欠だ。そしてそのためには膨大な資金が必要となる。

しかしそれにしても、選挙期間を大幅に短縮することで、少しでも金のかからない選挙を実現し、選挙資金を大幅に節減することで、もっと優秀で、魅力的な大統領候補者が、最後まで戦うことができる環境を提供することができるのではなかろうか。今後の課題だ。

## 3) メディア選挙の功罪

本稿からも、予備選挙の結果の報道、そして特に共和党、民主党、両党の全国党大会の報道が、選挙結果に大きな影響を及ぼしていることが確認できたことと思う。これはある意味では、有権者に豊富な情報を与え、より良い意思決定を可能にする、と言う意味で、結構なことである。しかしそれと同時に、報道の仕方によっては、選挙結果に“ゆがみ”をもたらす危険性を秘めている。

メディアの報道がトップランナーに集中することは、すでに度々、指摘されているところである。〈鮑戸、2001年A、参照〉。また、2大政党に比し、第3党、さらにはそれ以外の弱小政党の候補者については、ほとんどメディアは無視している。これが第3党の優秀で魅力的な候補が出て脱落して行く大きな理由になっていることであろう。メディアは公正な、フェアな競争を促進するのではないといけない。この点も十分研究を積み重ねて行く必要がある。

また、第1回テレビ討論のところで触れたような、メディアの「フレーミング効果」については、慎重な配慮が必要であろう。メディアの持つ大きな影響力をいつも承知した上

で、あまりに安易な、バイアス報道にならないよう、配慮する必要があるだろう。

#### 4) 世論調査の功罪

今回の選挙で、特に注目された点は、いくつかの画期的な「合同調査」が、実現したことであった。今回は、共和党と民主党が合同で、Lake、Shnell、Perryらにより、Terrance Groupという調査機関が作られ、両党の全国党大会時など、共和・民主両候補の支持率を、毎日調査することが出来た、などは、画期的な試みであった。両党が共同で調査を行なったために、調査のサンプル総数、したがって調査の精度も大きく向上し、しかも、本日の支持率、何%と、毎日のように支持率の変化を追うことが出来、一つ一つのイベント、毎日の大会のプログラムの効果なども、個別に類推することが出来た。

また、一般投票の開票速報のために、投票日に行なわれた大規模出口調査も、前述のごとく、ABC News, CBS News, CNN, Fox News, ABC News, そしてAP 通信社が大連合して結成した、VNS (Voter News Service) による画期的調査であった。

しかしこの場合は、最初から批判の嵐に遭遇することになった。それは、調査を過信するあまり、調査の誤差範囲を遥かに超えた活用をしてしまったことによる、開票当日の報道ミスによる。しかしこれは、合同調査そのものが悪いわけではなく、正しい分析、正しい活用ができる体制を、テレビ局各社が持つ必要性を明示した事件であり、今後の発展に大きく寄与するものであろう。

また、このような共同調査は両党の全国党大会の調査の時のように、単純に両候補の支持率の推移を見る、というようにときには、威力を発揮するが、開票速報のテレビニュースや新聞記事を見ると、今回は新聞各社も上述のテレビ局連合の調査を利用していたので、上述のごとく、各紙、どれもこれも同じデータで、変わり映えのしない記事となり、筆者などは落胆することになったが、この点は、一工夫、必要であろう。やはり、勝因、敗因の分析ともなれば、各社、知恵を絞って、競争すべきかも知れない。共通点もありながら、微妙に違うデータから、勝因・敗因の真の姿が立体的に浮かび上がるというものだ。さらに、意外な新しい視点による勝因・敗因分析などが成功すれば、これこそ各社の「実力」を示す大きな指標となろう。筆者なども、いままでは、共同調査の推進をもっぱら主張してきたが、あまりに安易に、共同調査にすべて移行してしまうことは問題かも知れない。主題により、またほどほどの合同調査を志向してゆくことが重要であろう。今後の課題である。

#### 5) 司法と政治との関連

今回はカリフォルニア州での開票騒動のおかげで、さまざまな問題が明らかになった。もちろんこれらの問題の多くは、史上稀に見る大接戦という異常事態で起こったことだが、今後もそのような事態があり得ないわけではない。少し詳しくこの点も考えておこう。



今回の事態は、結果的には、アメリカ大統領という、アメリカだけではなく、今日の自由世界でのリーダーが、アメリカ国民の意思によって選ばれたのではなく、フロリダ州最高裁と、アメリカ連邦最高裁という司法での戦いで決まった、という側面があることだ。もちろん「3権分立」は重要な制度であり、政治で決着がつかないとき、司法の助けを借りるのは止むを得ないことであろう。しかし今回の州最高裁も、連邦最高裁も、実は裁判官のイデオロギー（政党支持）が、強く判定に影響を与えていたことは、問題だ。すべての裁判官が客観的な判断で決してイデオロギーの影響は受けていないと断言しているが、結果は、州最高裁は極めてリベラルな（民主党寄りの）判決に終始し、また連邦最高裁の最終判断は、5対4というきわどい判定であり、しかも9人の判事のうち4人の民主党員が反対、その他の5人が賛成という判断であった。イデオロギーと関係なく、ニュートラルに判断したと強弁しているが、結果は明らかにイデオロギーが関わっているといわざるを得まい。このような少数の偏った判事たちの判断で、アメリカ大統領が最終的に決定したということは、やはり今後に禍根を残すことになるだろう。早急に、こうした事態が起こらないような対処を工夫する必要があるだろう。

#### 6) 機械投票の問題と地方自治

最後に、フロリダ州での機械投票が、各郡でバラバラ、しかもかなり粗雑な機械投票が行なわれている点について、批判が集中した。確かに見にくい、間違い易いものも多々見られたが、しかし日本と違って、各郡で保安官の選挙や、さまざまな課題についての住民投票も、一緒に行なわれる大統領選挙では、投票用紙は郡ごとに異なるため、投票方式は伝統的にすべて各郡に任されてきたもので、それは民主主義の原点である。今後もこのように、国は各州を尊重し、さらに州も各郡を尊重する、という制度は維持されるべきであろう。簡単な技術的な問題は改善の必要があるが、もっと日本のように統一すべきだなどという議論は間違いだ。こうした長所を生かしながら、新しい時代に即した改善を、進めてゆく必要があるだろう。今後の課題である。

<付記>：本研究は「2000年度、東洋英和女学院・長野賞（在外研究、前期、及び、国内研究、後期）」によって行なうことが出来た。記して、ここに感謝の意を表させていただく。

お二人のレフェリーからは、懇切・有益なご示唆をいただき、本稿を大幅にリライト・リファインすることができた。また、民主党、共和党両党の全国党大会の取材を担当された、NHKハイビジョン局、奈良原志磨子氏からは、党大会に関する膨大な資料を提供いただいた。NHK放送文化研究所、一色伸夫氏には、両全国党大会のアメリカでのテレビ報道の取材について、多大なご尽力、ご協力をいただいた。さらに、在ボストンのタカコ・トリス・ヤング氏は、開票速報前後でのアメリカ現地でのメディア報道について、膨大な資料を収集

し提供いただいた。これらの皆さんに心から感謝したい。

#### <注>

1. 「ヤッピー」: young urban professional の略で、若くして「功なり名遂げた」都会人。1970年代にこれらの人達が、政治に、消費に、大いに影響を与えたと考えられている。詳しくは、飽戸弘、『新しい消費者のパラダイム』、中央経済社、参照。
2. 「ネガティブ広告、ネガティブ・キャンペーン」: 相手を激しく攻撃するタイプの競争広告。本来は、「やってはいけないことをやり、やらなければいけないことをしていない、広告」の意。詳しくは、飽戸、1992、飽戸、1989、ほか、参照。
3. 「メディアのフレーミング効果」: 人々の判断の基準、判断のフレームが、メディアによって変更されることにより、人々の判断そのものが、影響を受けて変化すること。
4. 「再編成・脱編成」: 政党支持の第一党が入れかわることを再編成という。1930年代にFDR（ルーズベルト）のニューディール政策で第一党が共和党から民主党に入れかわったことは有名。再編成までとはいかないが、両党の主要な支持層が大量に離脱していくことを脱編成という。

#### <参考文献>:

- 飽戸 弘、「アメリカ大統領選挙と国民の政治参加——メディアの功罪」、『マス・コミュニケーション研究』、N0.59、2001年A、pp.107-123.
- 飽戸 弘、「選挙報道が世論形成に与える影響」、『月刊民放』、2001年B、4月号、pp.16-19.
- 飽戸 弘、『コミュニケーションの社会心理学』、筑摩書房、1992年。
- 飽戸 弘、『メディア政治時代の選挙』、筑摩書房、1989年。
- 飽戸 弘、「『悲惨指数』が勝敗決める、米大統領中間選挙」、『THIS IS 』、1986年9月号、pp.86-92.
- 飽戸 弘、『アメリカの政治風土』、日本経済新聞社、1980年。
- The New York Times, *36 Days*, Times Books, 2001, pp.380.
- The Washington Post, *DEADLOCK*, Public Affairs, 2001, pp.271.

#### <新聞・雑誌>:

- 「The New York Times」
- 「Wall Street Journal」
- 「The Washington Post」
- 「朝日新聞」

「日本経済新聞社」

「News Week」

「Times」

<主要インターネットURL\*>:

\* ここに収録したURLは、今日、アクセスできないものもある。新聞社、テレビ局などは、数日で記事、データを、アップデートするため、収録した翌週には、もうアクセスできない。また2000年度にあった選挙関連組織は、選挙終了とともに解散・閉鎖したものも多い。ご了承ください。原則として、<Top Page> はアクセスできるはずである。

<News Paper>

<http://www.nytimes.com/> <Top Page>

<http://www.nytimes.com/pages/politics/index.html?0912a> <New York Times; Politics>

<http://www.washingtonpost.com/> <Top Page>

<http://www.asahi.com/> <Top Page>

<http://www.asahi.com/> 2000/12/14 <「2000年、米大統領選、ゴア VS. ブッシュ」>

<http://www.kyodo.co.jp/> <Top Page>

<http://www.kyodo.co.jp/kikaku/uspresident/uspresident.html> <US President>

<Broadcasting>

<http://abc.go.com/> <Top Page>

<http://abcnews.go.com/> <ABC News>

<http://www.msnbc.com/news/> <NBC News>

<http://www.CNN.com/> <Top Page>

<http://www.CNN.com/video/netshow/> <CNN Video>

<http://cspan.org/> <Top Page>

[http://www.msnbc.com/news/NW-front\\_Front.asp](http://www.msnbc.com/news/NW-front_Front.asp) <Top Page>

<http://cbsnews.cbs.com/now/section/0%2C1636%2C250-412%2C00.shtml> <CBS News>

<http://www.nhk.or.jp/> <Top Page>

<TV Guide>

<http://www.tvguide.com/channel/> <TV Guide CHANNEL>

<http://www.tvguide.com/magazine/issues/000717/> <TV Guide Magazine>

<http://www.tvguide.com/listings/setup/Localize.asp> <TV Guide ONLINE>

<http://gist.abc.com/abc/grid.jsp> <TV Programs>

<Weekly Magazines>

<http://www.time.com/time/> <Top Page>

<http://www.time.com/time/magazine/archive/text/> <Time Archives>

[http://www.msnbc.com/news/NW-front\\_Front.asp](http://www.msnbc.com/news/NW-front_Front.asp) <Top Page>

<Political Organizations>

<http://www.rnc.org/> <Republican Party; Top Page>

<http://gop2000.philly.com/> <Archive; Republican Party Convention>

<http://www.democrats.org/index.html> <Democrat Party Top Page>

<Media & National Polls>

<http://www.nytimes.com/library/politics/newspoll.html> <The New York Times/CBS News Poll>

<http://www.usatoday.com/news/polldex.htm> <USA Today/CNN/Gallup Polls>

<https://online.wsj.com/login?URI=%2Fedition%2Fresources%2Fdocuments%2Fpollhome.htm>  
<The Wall Street Journal/NBC News Poll>

<http://www.washingtonpost.com/wp-srv/politics/polls/vault/vault.htm> <Washington Post Poll>

[http://cbsnews.cbs.com/network/htdocs/cbs\\_news/ESU%20ChtmlMARAPob.htm%5bBackpages%5d.htm](http://cbsnews.cbs.com/network/htdocs/cbs_news/ESU%20ChtmlMARAPob.htm%5bBackpages%5d.htm) <CBS Poll>

<http://www.abcnews.go.com/sections/politics/PollVault/PollVault.html> <ABC News Poll>

<http://www.voter.com/> <Voter Com; Top Page>

<http://www.CNN.com/ELECTION/2000/> <CNN Poll>

<http://www.gallup.com/> <The Gallup Poll>

<Academic & Non-Profit Data Archives>

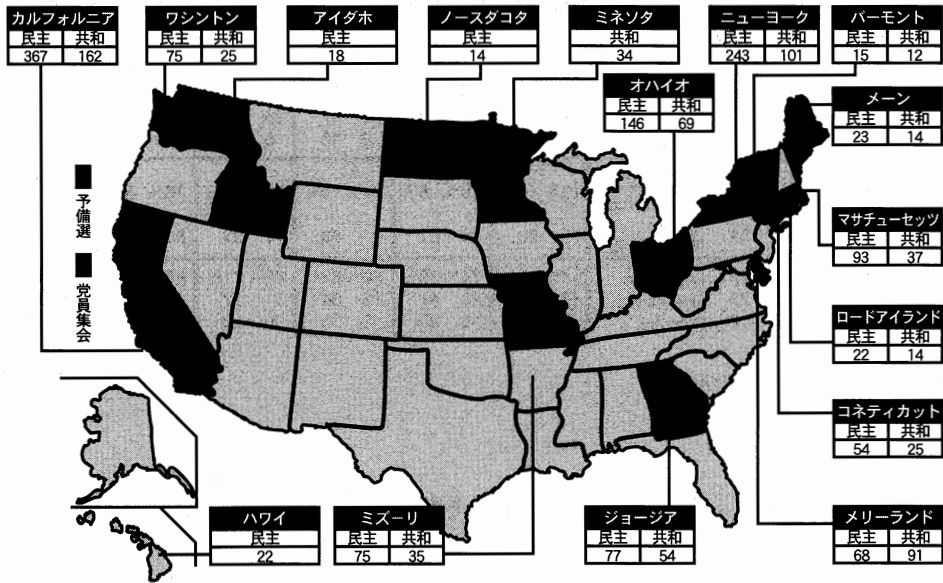
<http://www.ropercenter.uconn.edu/> <Roper Center for Public Opinion Research><*University of Connecticut*>

<http://www.umich.edu/~nes/> <National Election Studies> <*University of Michigan*>

<http://www.icpsr.umich.edu/index.html> Inter-university Consortium for Political and Social Research<ICPSR> <*University of Michigan*>

<付表1> スーパーチューズデーで選ばれる代議員数

スーパーチューズデー (3/7) に予備選・党員集会が開かれる州と選ばれる代議員数  
(AP通信による。ワシントン州の共和党は2/29の予備選ですでに12の配分を決定済み。ミネソタ州は代議員配分を決めない人気投票)



<「朝日新聞」、2000年3月7日、朝刊>

<付表2> スーパーチューズデーでの主要6州での結果（共和党）

PERCENT OF TOTAL							OPEN PRIMARIES						CLOSED PRIMARIES					
Massachusetts	Missouri	Ohio	California	Connecticut	New York		MASS.*	M.O.	OHIO	CALIF.	CONN.	N.Y.						
Voters for:							Bush		MacCain		Bush		MacCain		Bush		MacCain	
39%	56%	49%	60%	47%	52%	Conservative	53%	31%	70%	30%	60%	30%	70%	40%	59%	36%	60%	42%
40	33	40	33	37	35	Moderate	38	42	22	52	31	57	25	50	35	41	30	42
21	11	11	7	16	13	Liberal	8	27	7	19	9	13	5	10	6	23	9	15
8%	22%	24%	20%	12%	15%	Consider themselves part of religious right	10%	6%	29%	8%	34%	9%	23%	9%	16%	8%	16%	13%
86	72	72	75	84	81	Not part of religious right	79	90	64	87	61	88	70	87	81	88	78	85
34%	60%	72%	91%	75%	72%	Republican	54%	23%	74%	39%	86%	52%	89%	71%	89%	61%	84%	63%
57	31	21	18	22	27	Independent	44	64	23	41	12	34	11	27	9	35	16	34
9	9	6	1	3	2	Democrat	3	13	3	20	2	13	0	3	1	4	0	3

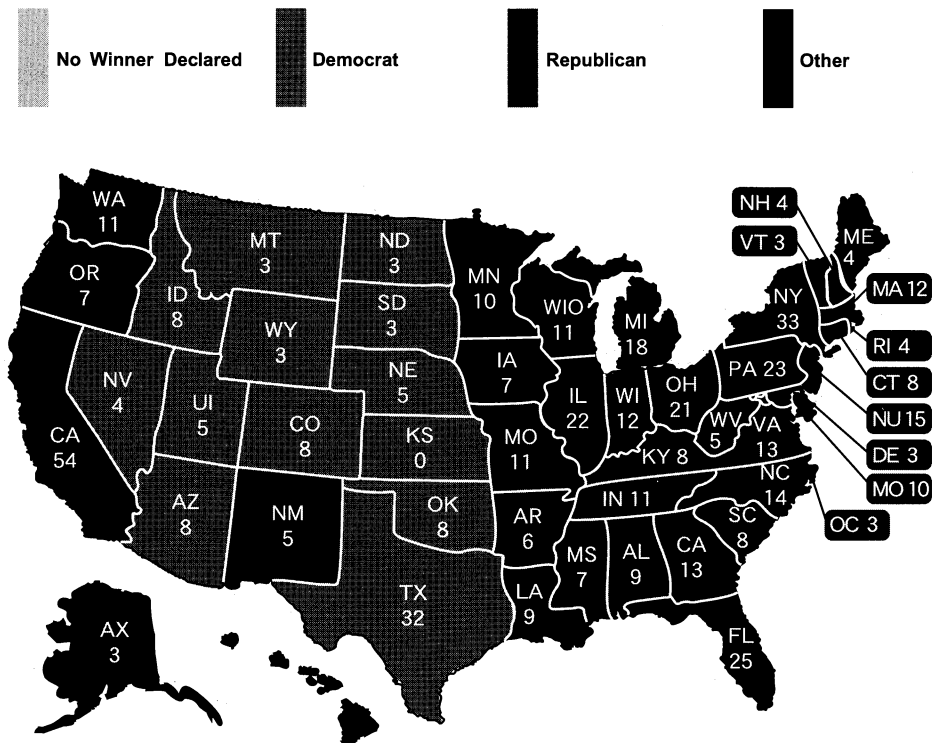
<newyorktimes.com 3/9/2000>

<付表3> スーパーチューズデーでの主要6州での結果（民主党）

PERCENT OF TOTAL							OPEN PRIMARIES						CLOSED PRIMARIES					
Massachusetts	Missouri	Ohio	California	Connecticut	New York		MASS.*	M.O.	OHIO	CALIF.	CONN.	N.Y.						
Voters for:							Gore		Bradley		Gore		Bradley		Gore		Bradley	
54%	49%	48%	50%	55%	54%	Liberal	51%	62%	49%	53%	42%	61%	45%	64%	58%	56%	51%	61%
37	41	41	42	33	37	Moderate	30	31	43	41	47	26	46	29	34	31	40	31
9	10	11	8	12	9	Conservative	10	7	9	6	11	13	9	7	8	14	9	8
27%	23%	42%	22%	32%	36%	Union member household	28%	24%	25%	17%	45%	34%	23%	21%	33%	32%	40%	28%
70%	77%	76%	86%	75%	84%	Democrat	76%	65%	84%	70%	83%	60%	88%	77%	82%	60%	90%	74%
26	20	20	13	22	15	Independent	23	29	14	27	14	34	10	20	15	28	10	22
4	3	4	1	3	2	Republican	1	6	2	3	3	6	1	2	3	2	0	4

<newyorktimes.com 3/9/2000>

<付表4> 州ごとの獲得選挙人数



<washingtonpost.com 12/21/2000 >

## 〈要約〉

本稿は、2000年アメリカ大統領選挙における意志決定の状況について、特にメディア報道の影響について、世論調査を用いて、実証的に検討・吟味を行おうとしたものである。

始めに、各州における予備選挙の状況、特にスーパーチューズデーの影響、共和党・民主党、両党の、全国党大会の果たした役割、そして3回にわたるテレビ討論の影響などについて、経過を追って検討して行く。

次いで、11月の一般投票の結果について、その開票速報時のテレビ報道の混乱について、そして今回はじめて生じたフロリダ州での開票をめぐる裁判合戦について、少し詳しく検討するとともに、それらについてのメディア報道の問題についても、考察する。

以上を総合して、今回大統領選挙における、国民の意思決定に対して、メディアの果たした役割について検討するとともに、今日のアメリカ大統領選挙制度のいくつかの問題点についても、有権者の立場から、若干の考察・提言を試みた。



## A Study of U.S. Presidential Election 2000 － Processes of Electoral Decision-Making in the Age of Media Politics －

AKUTO Hiroshi

The author tries to discuss and analyze impact and influence that mass media reporting had on the decision-making processes of people's voting behavior in the United States presidential election in 2000, primarily through the use of polling data.

First, I would like to describe the various events prepared and produced by both the Democratic and Republican Parties and their campaigners, and the electorates' responses to them, at the time of primary elections in each state, at the time of national conventions of both parties, and at the time of three successive TV debates, focusing on the impact of these media events and their media coverage.

Second, we will discuss the election results of popular votes in November. There was considerable confusion in TV news programs over the reporting of election turnouts, and there also occurred unusual fights and struggles over who won in both the Florida State and Federal courts.

In concluding these discussions, we can analyze the enormous impact of media on the decision-making processes of the electorate. Furthermore, through this analysis, we will be able to propose some revisions and reforms of the present system of the U.S. Presidential Election.